**№18　テーマ『人格の大きさをつくる精神的原理』**

**講話日2003年11月10日**

**司会：始めに社長よりお話をいただきます。**

**社長：うまくいったよね。今日、初めて松阪店の外弾圧見てきましたけどもね、すごくいいといいますかね、一回必ず、皆さんね、見とくといいと思います。はい。それと、３カ月に１回ね、今年、来年度も先生、全部、予定、決まっておりますので、今度、３日間の缶詰めになる研修会でもね、カレンダーを全部つくったりとかね、一部、今日も希望、僕の要望としては、人事特別とか、福利厚生委員会のね、メンバーも１人か２人、参加してもらってね、年間予定つくってくださいとかね、やってます、ね。特に来週は、来週の土日は、またイワイ先生、SMIが来てね、僕は今現在、先生にも言ってたんですが、すべての会議に出てないんですよ。出てない。もう出ると、ある意味で何もかもわかってて、もう、うわっとなっちゃうからね。もう出ないほうがいいんだよね。でも、大きな問題は起こってないので、それでだいたい成功だと思ってますが、ただ出ないだけでは能がないので、ちょっとした簡単な報告システムとかね、年内には絶対やりますが、IT関係の一部日報だとかね、今もコンピューターをいろいろ当たったりなんだかしてやってます。だから、事業計画は、ある意味で言や、１年間かかってやればいいだけで、11月、12月に実行できてもね、今年度の事業計画を達成すればいいというような形。頭の痛いのは、１階とか、３階とか、４階のね、採算を取るのもね、いくつかベンチマークして、ベンチマーク企業のセミナーに出てね、だいたい方向性を決めてますのでね、それも来年度の事業計画になってくると思います、ね。**

**はい、では、今日はちょっと商売とはちょっと関係ないところでね、先生のお勉強をさせていただきますので、しっかりとね、聞くように。よろしくお願いします。はい。**

**司会：ありがとうございました。**

**芳村：皆さん、こんにちは。**

**一同：こんにちは。**

**芳村：今日は年内最後のお話ということで、やらせていただきますけど、前回は、人格の大きさをつくるための実践的原理をですね、お話をして、レジュメにも精神的原理のことをちょっと書いてあったんですけども、具体的な内容としては、ほとんど話さないで終わってしまいましたので、今日は、最後の締めくくりとして、この人格の大きさをつくるための精神的原理という、そういうお話をして、今年のシリーズの終わりにしたいと思います。前回、この人格の大きさをつくるというね、ところで、この人格の高さ、深さというものは、これは個人的な努力でもですね、できないことはないけれども、人格の大きさというものは、これは人間関係の修羅場をくぐり抜けるという体験なしにはですね、本当の実力としての人間、人格の大きさというのは出てこないということを、お話をしました。で、そのためには、われわれは対立というものを恐れてはならない。で、特に、今は個性の時代というふうにいわれておりますからね。ですから、個性の時代というのは、お互いに違いを認め合って、違いを許し合いながらですね、付き合っていかなければならない。だけど、違うっちゅうことは、常に対立の要因を含んでおるわけですね。ですから、個性の時代というのは、その対立というものは、常に付きまとうものであって、対立のない状態をですね、望んではならない。常に対立を乗り越えていくということによって、自分を成長させていく生き方です。それが個性の時代における人間の大きさをつくる原理であります。**

**で、よく企業社会においてもですね、この競争というものがなかったら、成長、発展はないというふうにこう、いわれておるわけですけども、だけども、今日、競争というこの原理がですね、すでに企業発展の原動力ではなくなってきたと。あまりにも、その競争意識を鼻先にぶら下げながらですね、仕事をし、経営をするという、そういうこの仕事の仕方、経営の仕方というのは、もう醜い経営であってですね、品格がないとこう、言われるような、そういう時代なんですね。だけども、やはり、同業者がたくさんあったならば、競争という関係性そのものは、絶対になくなることがありません。だから、どうするかといったら、その競争という、この関係性をですね、ライバル会社を倒すというふうな方向性に持っていってしまう、そういうエネルギーの使い方をするんじゃなくって、現実に存在する競争という、この関係性から出てくるエネルギーをですね、内面化していって、そして、自己変身、自己創造、自己変革の力に変えていく。競争という、このエネルギーを外に向けてですね、相手を倒すんじゃなくって、自分の成長のこの力に変えていくというね、そういう仕方で、今、経営がなされるような、そういう時代になってきました。**

**で、それを通して、業態の転換を図っていってですね、で、同業他社よりもより的確に、時代の要請に応え得る会社になる。それがこの収益を上げていって、また時代に生き残っていく基本原理だというね、そういう認識が今、できてきておるわけですね。その意味で、人間関係においても、対立をなくそうとかね、対立のない状態を望むということは、弱気になってしまって、かえって仕事、人間関係からの逃げというね、そういうふうな状況に陥りやすい。人間関係には対立はなくならない。だから、対立をなくそうとするんじゃなくって、対立を乗り越えていく力をつくることによって、対立をエネルギーに変えて、自分を成長させていく。そういう意識がですね、非常に大事であります。**

**で、また多くの経営者がですね、また多くの仕事をする人たちが、問題とか、悩みがあったらいかん。問題があったらいかん。問題があったら、問題だと思ってしまってですね、問題のない状態にしなきゃならなん。何も問題がない状態に持っていこうというね、そういうふうなこの意識になりやすい。だけども、問題はなくなることはない。現実も不完全だ。自分は不完全だ。必ず常に問題はある。だから、問題をなくそうとすることは、これは経営の迷いであり、また生き方の迷いである。問題というものをなくそうとするんじゃなくって、問題を乗り越え続けていくことがですね、この生きるということであり、問題を乗り越えていくことが経営であり、問題を乗り越えていくことが仕事をするということなんだと。問題はなくならない。なくならない問題をなくそうとすることは不条理であって、これは原理的な間違いだということをですね、知らなければならない。問題を恐れてはならない。問題があることによってしか、人間は成長しない。悩みがあることによってしか人間は成長しない。クレームがあるから、成長するんだ。クレームがない状態というのは、会社の成長が止まった状態なんだ。そういうふうなですね、自覚で、われわれ、問題を恐れてはならない。対立を恐れてはならない。また競争という、この関係性が出てくることを恐れてはならない。それをどういうふうにですね、この自分の成長に変えていくか。会社の発展のエネルギーに変えていくか。そういうこの意識の仕方がですね、非常に大事であります。**

**だから、実践的原理としてですね、前回、お話をしたことですけども、人間の大きさをつくっていくためにはですね、対立というものに対する、新しい解釈が必要であると。対立というものを決して避けてはならない。対立を、この受け入れながらですね、生きていく力を、われわれは持たないと、個性の時代、互いに違ったものを持ちながら、共に生きていく力というものをつくっていくことはできません。その意味で、この対立というのをどういうふうに解釈するべきなのかと。対立というものは、自分が成長するために学び取らなければならないもの。自分にないものを持ってる人間が、誰であるかを教えてくれる現象が対立であって、われわれ、対立を経験することなしには、自分にないものを持ってる人間と出会えないんだ。対立したならば、その相手は自分にないものを持ってるんだから、だから、相手から何かを学び取って、そして、自分の考えや、自分の意識をですね、さらに高度にして、さらに厳密にし、さらに成長させていって、そして、自己を発展させていこうというね、そういうふうな、この受け止め方をしなければならない。対立しないような、自分と同じようなものを持ってる人間と付き合うことを喜んでおったのでは、それは安逸をむさぼる、易きに流れる人生である。そこには発展もあり得ない。**

**自分と同じ考え方の人間とどんだけ付き合っても、発展は成長しません。発展、成長はしません。人間は、自分と異なるものを持ってる人間と付き合って、自分にないものを相手から学び取っていく。それがこの人間関係からする成長の原理であります。自分と同じものを持ってる人間とどんだけ付き合っても、それは気楽でですね、あまり気を遣わなくってもいいから、楽なんですね。でも、楽をしておったんでは、成長はありません。やっぱり、この自分にないものを持ってる人間と付き合って、自分にないものを学び取っていって、そして、自分を成長させていく。それが、この成長する、発展するということのですね、原理であります。そんな意味においてもですね、この対立というものを恐れてはならない。対立は自分を成長させるために出てくるんだというふうなですね、そういうこの受け止め方をする必要がある。対立というのは、相手が自分にないものを持ってるから、対立が生じるのである。同じようなものを持ってれば、対立はしない。**

**だけど、残念ながら、今の人たちはですね、この気の合う仲間と付き合っておったらいいんで、気の合わんやつとは無理に付き合う努力はせんでもいいんだとね。この気楽な生き方をこう、求めてるんですね。これは、気楽でいいように見えるかもしれませんけど、これは人間が、この画一性と、それから真理は一つという、考え方をするところの理性のね、奴隷になってしまったが故に、そういうふうな生き方に、この陥ってしまったのであってですね、この人間が本当に人間としての、この成長ができるですね、そういう生き方をしようと思ったら、常にわれわれは自分にないものを取り入れていくというですね、そういう努力をすることなしには、精神的な成長というものはあり得ない。その意味で、とにかくわれわれは、対立に対してどういうふうなですね、理解の仕方をもって臨んでいくべきなのかといったら、対立というものは、この自分を成長させるために学び取らなければならないものを持ってる人間が誰であるかを教えてくれる現象である。**

**われわれ、対立の経験をすることなしには、自分が学び取らなければならないものを持ってる人間が誰であるかを知ることができない。対立しないような人間と付き合ってもですね、そこにはさしたる成長はない。もちろん、対立しないような人間と付き合ったらいかんっちゅうんじゃなくってね、それも大事なことですけども、だけども、自分を成長させようと思ったら、対立する人間との関係性というものを軽視してはならない。また、それを嫌だと思ってはならない。また、それを否定しようと思ってはならない。また逃げようとしてはならない。自分を成長させるためには、是が非でも、自分と対立する人間との出会いというものをですね、受け入れながらですね、自分を成長させていく。気の合う仲間とも付き合い、また、なかなかうまくいかない人間とも付き合って、共に生きていくことができる能力をつくっていく。そこにこの自分のですね、人間としての大きさをつくる、成長の原理があるんだということをですね、考える必要があると思います。**

**とにかくこの人間の大きさというものをつくっていくための実践的原理の根底にある、この考え方はですね、対立をどう解釈するかということであって、対立というものは、自分が学び取らなければならないものを持ってる人間が誰であるかを教えてくれる現象なんだ。そういうふうに理解することによって、自分を成長させることができる。残念ながら、今のですね、そのアメリカ人というのは、自分たちの考え方が、この正しい、偏見のない正しい考え方であって、そうではない考え方はですね、間違っておったり、あるいは低い考え方であったり、あるいは、古い考え方であるからですね、だから、それを改めさせなければならないというね、そういう独善的な考え方になってしまって、そして、そういうこの自分たちとは違う考え方というものを批判し、否定するような、そういう意識からですね、国際戦略を練って、ひどい場合には、イランやアフガニスタンの場合のように、戦争してでもですね、彼らの考え方を改めさせて、そして、アメリカ人と同じような考え方をするような、そういう人間に成長させてあげようというかですね、変えていかんないかんという、そういうふうな、独善的なですね、自分のみ正しいとして、自分と違う考え方や、自分と違う立場や、自分と違う文化は劣っておるとか、間違っておるとか、そういうふうなですね、受け止め方をしておる。**

**だけど、これは確実に個性の時代には合わない考え方であります。ですから、もうすでに世界、社会がですね、個性の時代になってしまっておるのに、アメリカはそういう画一的なですね、政策をもって、独善的なことをするから、だから、多くの国からですね、アメリカへの信頼と尊敬の念というのは、どんどんこの縮退していってしまってるというかですね、従来のような尊敬と信頼とをですね、アメリカは獲得できない。世界から批判されるような、そういう国家に今、なってしまってるわけであります。これは、明らかに個性の時代に生きる、国家の姿ではない。われわれはそれと同様の過ちをですね、犯してはならないということですね。**

**その意味においてもですね、人間性の成長という観点から、自分と違う考え方や、自分と違う立場や、自分と違う感じ方や、自分と違う性格や、自分とは違う宗教や、自分とは違う文化を持ってる人間と共に生きる力をつくっていくっちゅうことは、これは個性の時代においては、どうしても重要な課題であります。それを通してですね、個性の時代においては、自分を成長させていくことができる。そういうことにもなってきますので、ぜひ、前回、お話した、この成長の原理というか、人間の大きさをつくる実践的原理というものをですね、よく理解しておいてもらいたいんですね。それをベースにしながら、今日のこの精神的原理の話を聞いてもらいたいと思います。**

**で、意識的なですね、意識的な努力として、どういうこの努力の仕方をするならば、われわれは自分の人間性をですね、成長させることができるのか。で、そのためにはですね、この大きさをつくるということをするためには、常にこの全体への視野を失ってはならない。全体というものを常に意識しながら生きるというですね、そういう生き方が非常に大事であるということが、まずは言うことができます。で、ついつい、この人間というのは、自分の立場からものを見てしまってですね、そして、この全体というものの中に自分がいるということを忘れてしまってですね、そして、この自分本位な考え方や、自分本位な意見でですね、いろいろ、文句を言ったりね、批判したりするっちゅうことはあるわけですけど、この社会の中で生き、また組織の中で生き、また家庭の中で生きるからにはですね、常に家族としては、家族全体、家全体のことを考えながら、自分がどう行動するべきか、自分がどう言うべきかということをですね、考えていないと、大きさのある人間には成長しませんし、組織の中で生きるからには、その組織全体のことを考えながら、今、その組織全体のために今、自分はどういう行動をしたらよいのかというね、そういう判断をしないと、組織人としての成長というものは、絶対にありません。**

**やっぱり、組織の中で何かしら責任を持った仕事をしていこうと思ったら、自分の立場からものを言ってはならない。自分の立場も大事ですけど、自分の立場が組織全体との関係において、どういうこの関係性にあるのか。どういう立場にあるのか。どういう意味を持ってるのか。そのことをこう、意識しながらですね、全体との関係性を常に頭に入れながら、今、ここで自分がどういう行動を取り、また、どういう判断をし、どういう言葉を発すればよいのか。そういうことをですね、考えていくことによって、人間の意識の大きさ、人格の大きさというのはできてくるわけであります。自分の立場からのみ、ものを言うんじゃなくってですね、全体との関係というものを常に自分が意識しながら、この会社全体のことを考えれば、どういう行動を取り、どういう発言をし、どういうこの意識でですね、生きていったらよいのか。それを考えると、だんだん、だんだん、人間は大きさが出てきますし、また、この組織において責任のある行動、責任のある生き方、責任のある言葉というものを吐くことができるようになってきます。**

**で、これは組織の中で立場が上がるならばですね、当然そういうことが要求されてきます。責任を持って何かしていこうと思ったら、会社との関係性、会社の中で責任を持って何かしていこうと思ったならば、常に会社全体のことを考えながら、自分の言動というものをですね、考えていかなければならないですね。そういうふうにして、常に全体のことを考える。そういうこの全体のことを考えながら、自分が今、取るべき言動というものを考えていくと、それに従って、人間の大きさというものは自然にできてくるわけであります。それをこの部分とか、立場に拘泥してですね、そして、その対立する関係をつくってしまうような、そういうこの人間では、組織を破壊し、また、全体の秩序をですね、壊してしまって、そして、自らもですね、小さな意識でしか生きられないような、そういうこの人間になってしまう。常にどれだけのですね、大きさの世界というものを自分が意識しながらですね、生きておるかということは、これは非常に大事な問題であります。**

**これは、この生命論からね、くる話でありまして、人間の命というのは、60兆個の細胞から成り立っておるというふうにこういわれておりますけども、60兆超の細胞が一個の命としてですね、このまとまりを持った、そういうこの統一された、統合された存在としてあり得るのはですね、何故かといったら、60兆個の細胞、一個一個がですね、命全体というものを常に意識しながら、命全体の中で自分はどういう役割を果たせばよいのかということを、人間じゃないから、考えてるわけじゃないんですけども、だけども、常にそういうこのつながりを意識しながら、一個一個の細胞が働いてるんですね。だから、60兆超という、本当にもう、すごいね、数の、そういうこの細胞から成り立っておる命であるのにですね、ちゃんと命の統一というのが、常に保たれてるという状況にあるわけですね。そのことによって、命という組織はですね、常にこの健全に、あるいは、いろんな問題をね、みんながこう、協力して乗り越えていって、そして、この生きているという、そういう状態をこう保ててるわけなんですね。**

**で、生命というのは、そういう意味で、よくスポーツでいわれますけどもですね、All for One、One for Allという、そういうふうなこの一個一個の細胞が、全体というものを常に意識しながら働いておる。また、命というのはですね、胃が悪くなったら、胃を責めて、おまえ、なんとかしろというような、そういうことじゃなくて、胃が悪くなったら、命全体がその胃を治すためにですね、協力して、そして、働くという、そういうふうな関係性にあるわけですね。これが、いわゆる有機的組織というですね、生きた組織の原形というか、理想になる姿であります。そういう意味で、人間が組織の中で、あるいは、社会の中で生きる場合でも、常にですね、全体のことを視野に入れながら、全体のことを意識に置きながらですね、自分が今の立場において、どういうふうな言動を取ればよいのかという、そういうふうな生き方をし始めると、人間の大きさができてくる。すなわち、人間の大きさというのは、人の上に立つ人間になれるというね、そういう資格がこの生まれてくるというふうに、言うことができるわけであります。全体の視野を持たないような人間は、人の上に立つような能力は絶対にできてこない。常に全体というものを意識に入れながらですね、自分の言動というものをこう、工夫していくというふうなですね、そういうこの努力が自分の大きさをつくっていくというために、どうしても大事なですね、この要件であります。**

**で、その意味でですね、この全体とはいったいなんなのかということをですね、もう少し、具体的に考えていかなければならないんですけども、全体というふうな、このものは、これは常にその学問的に言うと、時間、空間という枠組みというものを持ってですね、存在してるということに、なってきます。で、あらゆるものはですね、時間、空間という、そういうこの枠組みの中でいろんなことが生じる。だから、全体ということを考えるためにはですね、この時間的全体性、空間的全体性という、そういうこの構造というものを意識しながら、全体というものについては考えていかないと、具体的な、実践的なこのあり方というんですかね、どうすればよいのかという行動の指針、具体的な方法論、やり方というのが出てきませんので、まず全体というものを、この空間的全体性、時間的全体性という、そういう構造で全体は成り立っておるんだということを意識して、で、次には、この空間的全体性とはなんなのか。時間的全体性とはなんなのか。そういうふうに考えていきながらですね、少しずつ具体的に、どういうふうにするならば、意識の大きさ、人格の大きさというものをつくっていくことができるのかというふうにしてですね、徐々に細部にわたって考えていくという、そういうふうな道筋になります。**

**で、漠然とね、全体といっとると、なんかばくっとして、漠然としておってですね、もやっとしておって、はっきりしたことが言えないんですよね。それを分析していくことによって、細かい厳密なはっきりしたことが言えるという、そういうことになってくるわけであります。そんな意味で、全体といってもですね、そこには構造があって、全体には空間的全体性と時間的全体性という、その構造があるということをですね、まず知ってもらいたい。で、これはやっぱり、非常に学問的に大事なことであってですね、どんなことを理解する場合でも、それを偏りのない、この正しい理解の仕方をしようと思ったならば、常に時間、空間という、この枠組みを使って物事を考えていくということが大事なんですね。一個の、その一人の人間を理解する場合でもね、その人が今、どういうふうな、この性格で、どういうふうな仕事を持っておって、どういうふうな友達があって、どういう環境の中で住んでおるか。その人が今、持っておるですね、現在のさまざまな、その人のあり方というものを理解しただけでは、本当にその人のことを知ったとはいえない。その人のことを本当に知ろうと思ったならば、その人が生まれてから今日まで、どういう環境の中で、どういう育てられ方をし、どういう体験を積んで、どういうふうなですね、この勉強をして、そして今日までに至ったのかという、その人が持っておる、この時間的な成長過程、その人が持っておる、この個人史ですね、その人の歴史ですね。生まれてから今日までどうだったのかということと、今、どうなのかということをですね、この総合してですね、合体させて、ガッチャマンさせて、そして、その人がどうかっちゅうことがわかってくるというね、それが学問的に一個の人間を理解する方法です。**

**また、会社の中で起こってくる問題でもね、その問題をですね、現状分析だけでですね、今の関わりだけで、その問題を処理しようと思ったら、そこには必ずですね、大きな落とし穴、かえってその結果、また新たなる問題をつくってしまうという、そういうふうなことになりやすい。会社のさまざまな問題や悩みを解決する場合でもですね、今、その問題がどういうふうな影響を周りに与えておるのか。そのことをこう、考えるだけじゃなくって、その問題がどういうふうな根拠で、どういういきさつで、どういうプロセスを通って、その問題が出てきたのか。その問題が出てくる時間的な背景というものをですね、考えて、そして、それと今、その問題がどういうふうな影響を周りに与えておるのか。それをこう、合体させることによってですね、この現状分析という空間的な分析と、それから、歴史的考察という、この縦のですね、この時間的な考察を組み合わせることによって、交差点、交点ができる。その交点が、その問題の核心を突く、その大事なところということになってくるわけですね。そういうふうにして、その問題に対応していかないと、本当のその問題の乗り越え方というのが、こう見えてこないということになるわけですね。**

**これは常に現状分析と歴史的考察というものを、どんな問題を処理する場合でもですね、常に意識しながら用いなければならない方法論だというふうに言うことができます。子どもが罪を犯す場合でもですね、単にその子が、その罪を犯したことを処罰しただけでは、その問題は済まない。なんで、その子がそういうふうな罪を犯すようなですね、ことになってしまったのか。そのいきさつをですね、考慮していくということによって、その子をですね、更生させる方法、道も出てきますし、また再びそういう、この犯罪、そういう罪を犯させないようなですね、そういうこの対応の仕方というものも、見えてくるのであって、ただ結果論でですね、その罪を犯したから、その罪の償いをせんないかんという、そういうことだけではですね、その子の問題に本当に対応したとはいえないという、そういうふうにですね、考えなければならない。とにかく、どんな問題でもですね、現状分析と歴史的考察というものを組み合わせることによって、初めて問題は、その原因から解決していくということができて、本当に問題を乗り越えられるんだということをですね、忘れてはなりません。**

**だけど、多くの場合ですね、あまり歴史的考察っちゅうことは行われないで、もっぱら現状分析というですね、そういうことだけで問題に対応しようとしている場合が多いわけであります。そうなるとですね、結果としてその問題を解決しても、またそこから新たなるですね、問題をつくり出してきてしまったり、あるいは、この原因が解決されていないが故に、同様の問題がまたそのあとですね、何回も出てくるというふうな、そういうこのことになってくる。これはよく、最近は企業がですね、犯罪の温床になるっちゅうことがあって、で、この企業の中で悪いことをした人間は、その人だけに、その罪とか、責任を押しかぶせられて、会社を辞めさせられてしまう。会社がですね、そういうこの罪を犯すような人が出てくることをチェックできなかった、そのチェック機能の甘さというものをですね、ちゃんとこう、修正しないでですね、ただ結果論として、罪を犯した人間が悪いんだから、その人間を辞めさせれば、それでもういいんだというね、そういうふうな簡単な問題の処理の仕方をして、会社自身の成長にその問題を関係させていくっちゅうか、そういう問題が起きないような、そういう会社のシステム、チェック体制をつくっていこうとかですね、そういう会社自身を改良、改革、発展、成長させるために、その問題を材料に考えるという、そういうことをしないとですね、同じ問題が何回でも生じてくるというね、そういうことにこうなってくるわけであります。**

**その意味でですね、この歴史的考察というものを忘れないっちゅうことは、いろんな問題の処理の場合に非常に大事なこれは課題である。だけど、なかなかそれは手間がいるですね、そういう問題なので、なかなか多くの人たちは、そういうものに手を付けたがらない。であるが故に、この問題を乗り越える場合でも、中途半端な問題の乗り越え方、あるいは結果論で、結果だけを問題にして、校内暴力が起こったならばですね、校内暴力を起こしたらいかんという、そういうこの押し込め方というかですね、ことをして、なんで校内暴力が起こってくるのかという、その原因を突き止めないで、原因にさかのぼって考えていかないと、結果論だけで処理するというね、そういうことのために、この荒れた学校はなかなかなくならないというね、その状況が現在でも全国で続いておるわけであります。その原因は、歴史的考察という時間的な観点から問題を見つめてみるという、この姿勢がないから。すなわち、いわゆる全体的な視野がないが故にね、部分的な、空間的なそういう問題だけに対応して、時間的な観点からのですね、歴史的考察という観点からの対応がないが故に、この校内暴力はなくならない。家庭内暴力はなくならない。現在、なかなかその問題を乗り越えられないで、困っておるような状況が続いておる。**

**これもやっぱり、学問的に言えば、全体的視野をなくした人間の悲しさだというふうに言わなければなりません。全体的視野っちゅうのは、決して、会社全体とかね、家庭全体とか、社会全体とかっていう、空間的なそういう全体だけじゃなくってですね、時間的なそういうこの観点からのものの見方というものもですね、空間的な、そういう判断の仕方と同様に、それを組み合わせないとですね、本当に全体を見つめるという、そういうふうなことにはならないんだ。もうそのことのためにですね、いろんな問題のために、時間、空間という枠組みを常に意識しながら、それに対処し、この取り組んでいく。そういうことがですね、非常にこれは実践的な、具体的な対応の仕方として忘れてはならない大事な問題です。そこで、まずですね、全体といっても、空間的全体性と時間的全体性があるというね、そういう観点から、まず空間的全体性とはなんなのか。空間的な全体性というものをですね、意識することによって、人間の大きさをつくっていく原理はなんなのか。その観点からまずお話をさせてもらいたいと思います。**

**その空間的な全体性という観点からですね、人間の大きさをつくっていく場合にはですね、この自分が仕事をする場合に、どれだけの大きさの全体というものを自分が意識しながら、その行動をしてるかということですね。会社の場合では、自分が所属しておるですね、その課のことしか意識してない。課の人間しか意識してない。あるいは、その部全体のこの人間関係を意識しながら、その行動をしてる。あるいは、会社全体の人間関係を意識しながら行動してる。あるいは、取引先のことまで含めて、意識しながら行動してる。あるいは、株主さんのことまで考えて行動してる。あるいは、お客さんのことまで考えて行動してる。どれほどのですね、この大きさを持った全体というものをその人が自分の言動の影響が及ぶ関わりとして意識しながらですね、その仕事をし、生きてるか。それがその人間の大きさをつくる原理だと。今、その人間がどれほどの大きさの人間なのかということは、その人間は実践的に、どれだけの大きさの世界と関わっておるかによって、今のその人間の持ってる大きさが決まります。その人間の実践的に関わってる世界がね、単に自分の課だけのですね、この人間関係を意識してるだけだったら、それだけの大きさ。また、部の全体のことを意識し始めれば、もうちょっと大きさが出てくるとかね、そういうふうにして、どれだけの大きさの世界と自分が関わりながら、今、仕事をしてるか。今、自分が実践的に関わっておる世界の大きさが、その人間の今の人間、人格の大きさと比例するっちゅうことですね。**

**ですから、人間でも、政治家でもね、村長さんなら、村長さん止まり、町長さんなら、町長さん止まり。同じ人間でもですね、村長さんであるか、町長さんであるか、市長さんであるか、県知事であるか、あるいは、国会議員であるか、あるいは、総理大臣であるかですね、それによって、この人間の大きさは確実に決まってくるんですね。自分が実践的にどれだけの大きさの世界と関わりながら生きておるかが、その人間の持っておる今の大きさを決定する。そして、その人間が持っておる大きさの可能性というのはですね、その人間が実践的ではなくっても、意識において、どれだけの大きな世界を意識しながら、自分が今、生きておるかですね。この町のことしか意識しないで生きておる人間、日本のことしか意識しないで生きておる人間。あるいは、世界のことまで意識しながら生きておる人間。あるいは宇宙のことをですね、この意識しながら生きておる人間。その自分の意識の大きさによってですね、その人間の人格の大きさ、その人間の人間性の大きさというのは確実に違ってきます。そういうふうにですね、自分自身がどれだけの大きさの世界と具体的に関わっておるか。自分自身がどれだけの大きさの世界を視野に入れながらですね、生活し、仕事をし、生きておるか。これがですね、自分の人間としての大きさというものを育てていく、非常に大事なこの精神的原理ということになるわけですね。**

**その意味でですね、少しでもこの自分の意識をですね、広げていく努力ということをしなければならない。意識を広げていこうと思ったならば、知識を求めなければならない。勉強せんないかんっちゅうことになってくるわけですね。この意識の広がりというのは、知識の広がりですからね。ですから、より大きな世界のことを知ろうとするという、そのことによってですね、この自分の意識の世界が拡大されていく。自分の意識の中に、この存在する知識の量が、具体的にその人間が生きる世界の大きさというものを決定するということに、なってくるわけですね。なんで勉強せんないかんのかということもそこからこう、出てくるわけなんですけども、なんで勉強せんないかんのか。なんでいろんな知識を獲得せんないかんのか。人間は知ってる世界でしか自由に動けません。知らんとこへ行ったら、不自由で動きづらいというか、どうしていいかわからんのですね。知識が増えてくればくるほど、人間、自由に振る舞え、自由に行動できます。すなわち、知識の量は、自分の自由度と関係してくる。自分が自由に羽ばたける世界というのは、知識を持ってる世界なんですね。知識の量と自分のこの自由に行動できる世界の広さとはイコールなんですよ。本当に自由でありたいと思ったならば、われわれは知識を追求しなければならない。**

**知識の量は、自分の自由度を決定する。実際問題、知らん世界へ行ったらね、どう動いてええかわからん。何していいかわからんということで、じっとしてしまいますよ。知っとったら、あっちへ行ってみようか、こっちへ行ってみようかでね、いろいろとその行動の範囲がこう、広がってくるわけですけどね。知らんと動けません。もうその意味においてもですね、このいろんな世界についての知識を獲得していくということは、自分の意識の大きさ、意識の広さをつくっていくという意味で、非常に大事なことであって、それがこの自分の人間性の豊かさとかですね、心の広さとかですね、そういうものをですね、つくっていく、実践的な力となってくるわけなんですね。そういう意味でも、この知らんよりは、知っとったほうがいいと。少しでも、より広い範囲のですね、知識を求めていくということはですね、この仕事をしていくうえでも、生活のうえでも、自分が自由に行動できる、自分の行動の幅が広がってくるというね、そういうことで、非常にこれは大事なことです。**

**社会に出れば、人脈が大事だといわれますが、人脈も人間の大きさなんですね。どれだけの、この範囲のですね、人たちのつながりがあるか。これもその人間の大きさを確実に決定します。人脈がなかったならば、仕事は発展しませんからね。発展するということは、仕事が伸びることだし、また会社が大きくなることです。人脈も空間的広がりなんですね。知識も空間的広がりなんですね。そういうふうにしてですね、より大きな世界につながりをつくっていくという、その努力がですね、実践的、具体的に自分の大きさをつくってくれます。ですから、気の合う仲間と付き合っておったらいいんでね、気の合わんやつとは無理に付き合わんでいいわと。これは、俺はちっぽけな人間なんやっちゅうことを証明しておるような言葉なんですね。より広い範囲のですね、人間と付き合える力をつくっていく。それが、その人間が大人物になっていく道筋なんですね。大きさのある人間になっていく道筋なんですね。そのこともですね、意識しながら、われわれは、この仕事における能力をつくるということを考えなければなりません。能力というのは、理性の力だけが能力というんじゃなくってね、人脈も能力です。知識も能力です。それが自分の、この仕事の大きさをつくってくれることになってきますからね。**

**もうとにかく、そういうことを全部含めてですね、まず空間的全体性とはなんなのか。空間的全体性という観点から、この人間の大きさをつくっていこうと思ったならばですね、どれだけの大きさの世界と自分が実践的に関わっておるのか。どれだけの大きさの世界を自分が意識しながら、現実に生活しておるのか。そのことを考えながら、より大きな世界と関わることができる自分、より大きな世界を意識しながら生きることができる自分、そういうふうにですね、この自分の意識の世界を広げていくという努力をする必要があるわけですね。これが、空間的な全体性という観点から、人間の大きさをつくっていくための第１番目の、原理であります。**

**このレジュメでは、２番目に書いてしまいましたけども、まずはですね、この空間的全体性という観点から言うならば、今、申し上げたことが、まずは基本なんですね。その次にですね、この大事なことは、そこで対存在の原理と書いてあることなんですけども、対存在の原理とはいったいどういうことなのかと。全体というものはですね、図表で描けば、全体というのは、円でね、この丸で示すんですよね。全体というのは、これが世界全体ということだったとするとね、この全体の中でいろんな現象が起こってくると。そのある現象が起こればですね、人間というのは、肉体を持ってますから、今、自分の肉体があるところからしか、ものを見ることができませんからね。今、自分の肉体のあるところでしか感じられませんし、今、自分が肉体のあるところでしか判断できませんし、今、自分の肉体のあるところでしか考えられませんから、だから、自分が今、ここにおるとすれば、こっからしかこのものを見ることはできないと。自分はこの現象についてね、こう思うということをですね、言えば、必ずですね、現実社会というものは、いや、そうじゃないじゃないか。こうやないかっちゅうてですね、真反対からですね、違ったことを言ってくるというね、そういう人が必ず出てくるわけですよ。**

**すなわち、自民党がおったら、必ずそれと真っ向から対立する共産党がおるようなもんでですね、その考え方というのは、決して意識的ではないというかですね、一つの見方しかできないんじゃない。どんなことでもですね、360度の観点からですね、ものを見ることができるというね、このこともやっぱり、知ってるということは、非常に大事なこれは人間の大きさをつくる原理なんですよ。そして、そのことをもっと原理的に、簡単に言ってしまうとね、俺がこうだって言ったらですね、いや、そうじゃないじゃないかと言って、真っ向から、180度違うところからですね、その自分の考えに対して対立してくるという人間が必ずおるのであってですね、おらんかったらおかしいというね、そういうこの意識を持っておるっちゅうことが人間の大きさなんですよ。自分の言うことが正しくてですね、それ以外の者はですね、間違ってるんだという、そういう独善的な考え方を持ってしまうと、自分に対立する考え方の人間が出てくると、むかつくわけですよね。それは、もうちっぽけな人間のね、証明であります。**

**大きさのある人間というのは、自分はこうだと思っておってもですね、真っ向、それとまったく違う考え方が同時に存在するんだということも知っておって、また、90度ね、この違う観点から横やりを入れてくる人間もおる。いろんな考え方がですね、現実には存在して、それでいいんだと。どういうこの立場からね、ものを言っても、それも全部、現実を知るための材料で、すべて正しいんだというね、そういうふうなこの意識で、自分が生きておることができるっちゅうことが、人間の大きさなんです。そういう意識を持つことによって、どういう考え方なり、どういうこの人間が出てきても、それによって自分が動揺しないというね、不動心という、そういうこの心ができるんですね。この不動心というのはですね、動じない心とこう書くわけですけども、まったく動かないというんじゃないんですね。少しは、違ったものに出合えば、何かこう、それによって自分は動揺するんですけども、だけども、動揺しても、すぐにですね、元の平常心に戻ってしまうというのが、不動心なんですよ。自分を見失うっちゅうことになってしまわないっちゅうことが、不動心なんですね。**

**だから、びくともしない、全然動かんということは死んでしまってるんですからね。人間、心がある限りは、少しは動揺する。だけど、その動揺が自分を見失ってしまうほどにですね、動転してしまうんじゃなくってですね、自分を見失ってしまうほどに、その自分と違う考えに対してむかついてしまうんじゃなくってですね、冷静に、少しはちょっとびっくりしても、すぐに元のですね、平常心に戻って、自分を取り戻して対応できるという状態が不動心というね、そういうこの状態であります。こういうこの、どんなことが起こってもですね、動揺しない。すぐに冷静な自分をちゃんと取り戻して対応していける。どんなことが起こってもですね、びくつかない、自分が崩れない。そのことを、そういう人間になるためには、どんなことが起こっても、それは当然、あり得るべきことなんだと。当然そういうことがあってもいいよなという、そういう気持ちが出てこないと、この動揺しないという、そういう状態の自分をつくれないんですね。自分の意識のないような、とんでもないことが起こると、人間はびっくりして動揺します。だから、ひょっとしたら、東海大地震が来るかもしれない。それについて備えてなきゃいかんという、そういう準備をしておったらですね、地震が起こったときでも、全然そんなこと考えてないで地震が起こってしまうっちゅう状態じゃなくって、いつか必ずやってくるんだと。そういうこの意識があるだけでですね、動転して自分を見失うっちゅうことはなくって、冷静に対応できるという、そういう自分に、この戻ることができるわけですね。そういう状態が、この不動心といって、人間の大きさというものをですね、このつくるために非常に大事な原理です。**

**現実にはですね、こういう平面的なね、ことだけじゃなくってですね、例えば、この富士山からね、富士山から地上を見る場合でもですね、地上にはいろんな建物がですね、建っておったりして、あるわけですけども、この２合目から見たらこう見える、５合目から見たらこう見える、てっぺんから見たら、また違ったように見える。どれが正しいんやっちゅうことはないわけですね。低いレベルの考え方をする人もおるし、中等レベルの考え方をする人もおるし、高度な考え方をする人も全部、正しいんですね。全部それは間違いじゃないんですね。全部真実なんですよ。これをそのレベルが低い考え方はいかんちゅうてですね、そのレベルの高い考え方の人は、レベルの低い考え方はいかんという、そういうことを言う人は、現実を見ることができない。そういうこのゆがんだ、ちっぽけな意識を持ってるっちゅうことになるわけですね。この立場から見たらこう見えるっちゅうことは真実なんだ。それは本当なの。それも認めることができる。そういう心が、広い心、大きな心ということになってくるわけですね。**

**そういうふうにして、どういう考えもですね、当然それはあっていいんだというね、そういう気持ちが非常に人間の大きさというかですね、落ち着きという、動揺しないというね、そういうこの大きな心というものをつくってくれます。実際、大事なことはですね、俺はこうだっちゅったら、いや、そうやないやないかと言う人間が必ず出てこなければならない。まだそういう人間が出てきてないっちゅうことは、まだ出てきてないだけで、いつかは出てくるんだというね、そういう気持ちを持っておったら、それに対する備えができますからね。ですから、そういう人間が出てきたときに動揺しません。そういう状態が人間の大きさということなんですね。思わざることが起こってしまうと、人間は動揺します。だから、当然それは、起こり得べきことであってですね、そういうものが起こって当然だと。そういうものがあって当然だ。そうなっても決しておかしくはないという、そういう気持ちがあるとですね、冷静に判断できます。これは、その会社での事故とかですね、またいろいろな問題なんかでもですね、予想だにもしないような問題なり、事故が起これば動転しますけども、当然そういうことも起こり得べき可能性があるということを知っておるとですね、その起こったことに対して冷静に対応できてですね、そして、この正しい処置、解決ができるという、そういうことになってきますけども、全然そんなこと予想だにもしてないという状況になってくると、その人は、そのことによって、この自分を見失ってしまってですね、そして、そのどうしていいかわからんという、そういう状況になってしまう。それは、やっぱり、人間の小ささというものを物語る、この姿であります。**

**こういうふうなですね、構造をですね、哲学から言うと、どう言うかというと、これは対存在の原理というんです。あらゆるものは対という構造で成り立っておるのであると。対存在の原理というんですね。この対存在の原理というのは、これは宇宙が持っておる真実の姿ということなんですよ。宇宙というのは、これはマイナスエネルギーとプラスエネルギーとが、エネルギーバランスを取りながら、宇宙の秩序をつくってるという、対の構造になってるわけですね。宇宙に存在するものは、すべてこの対という構造で、あらゆるものは存在してます。だから、宇宙というのは相互補完的な関係で、あらゆるものが影響し合ってるというふうにこういわれるんですけども、それは具体的にはなんなのかといったら、光には影がある、表には裏がある、右には左がある、上には下がある、前には後ろがある、善には悪がある、美には醜がある、真には偽がある、長所、短所、清と濁。清濁併せ呑むという言葉もありますけれども、常にですね、いろんなものは対という構造を成しておる。人間の体もやっぱり、左右だいたいシンメトリー、対象というね、そういう釣り合いを取りながら、バランスで生きてるという、そういうこの状態ですし、また、人間のこの体を支配してる神経系でも、この交感神経と副交感神経が互いにバランスを取りながら、命のですね、状態を保っておる。自然治癒力というのでも、こういうバランスの働きでね、自然治癒力というのは成り立っておるわけですね。**

**自然治癒力というのは、このちょうどよい状態というものを、この中心にしてですね、その少々、上にぶれても、下にぶれても、健康な状態は維持できるというね、そういう状態が、この自然治癒力の幅ということですね。病気というのは、この自然治癒力の幅を超えたときですね、病気というふうにこう言われるわけであります。自然治癒力というのは、自分が持っておる生命力で少々のずれとか、ゆがみは直せるという状態が自然治癒力ですよね。命というのは、常にそういうこのバランスというね、そういうふうなこの力で命が保たれてる。だから、血糖値でも、この範囲に入っておったらいいとかね、最高血圧、最低血圧というのがあるとかですね。それにこう、みんな健康な状態というのは、ある一定の幅に収まるようになってるんですね。それはバランスで健康が保たれてるという、そういう状態だからですね、こういう、この自然治癒力の幅、健康の幅というのがこうあるわけであります。これも全部、その調和作用、あるいは平衡作用、バランス作用というね、そういう相対立するものがですね、お互いにそのバランスを取りながら、秩序を保ってるという、この宇宙の原理によって、こういう構造であらゆるものが存在してるわけですね。このことを常にちゃんとわかってるっちゅうことがですね、人間の大きさにとって非常に大事なことです。**

**対というのはどういうことなのかといったら、自分はこうだと言ったら、いや、そうじゃないと言うやつがあっていいんだと。右があったら左がある、上があったら下がある、前があったら後ろがある、表があったら裏があって、長所があったら短所があって、善があったら悪があるんだと。それがですね、この物事の本当のありようである。そういうことがちゃんとわかってくるとですね、人間の大きさができてくる。それを昔から、清濁併せ呑むという言葉で人間の大きさを表現しておるわけですね。清濁併せ呑むというのは、いいことをする人もですね、悪いことをする人もですね、共に人間として、否定しないというかですね、人間としてのあり方の幅としてですね、そういうものをこう、認めていくことができるというね、そういうのが、この清濁併せ呑むということであって、悪いことをする人も、悪いことをしたいと思ってするんじゃない。悪いことはしたくないんだけども、そうせざるを得ないような状況に追い込まれてしまって、人間は不完全だから、その弱さ故に、そういう悪いことをしたり、うそを言ったりするんだと。うそを言いたくって言う人間はいない。罪を犯したくって犯す人間はいない。だから、罪を犯した人間に対してでもですね、それをわかってあげるというかですね、なんでそういう罪を犯すような状態になってしまったのかというね、そういうことをですね、このさせてあげてですね、そして、その心の苦しさとか、つらさというのをわかってあげようとするとかですね。あるいは、この罪を犯した人間のつらさ、悲しさ、苦しさというものをこう、わかってあげようとする。それが、清濁併せ呑むというね、そういうこのことができる人間になるためのですね、この方法であって、いいことをしたらいいけど、悪いことをしたらいかんというですね、そういう単純なこの理性的な判断で生きてしまうとですね、この人間の社会、人間というものを本当に理解することができなくなってしまう。**

**これは非常にですね、深いこの考え方がその中には含まれてるわけですけども、理性で判断するとですね、善はいいけど悪はいかん、美はいいけど醜はいかん、真はいいけど偽はいかん、表はいいけど裏はいかん、長所はいいけど短所はいかんというね、そういう判断になってしまって、相対立する価値の片方しか認めないというね、そういうふうな、この価値判断に陥ってしまう。これが、理性によって作為的につくられた人間的認識というものなんですよね。だけども、宇宙というものは、常に相対立するものが、互いにバランスを取りながら、お互いにお互いを必要としながら存在してるという、そういう関係性にある。それが宇宙の大きさなんですね。ということは、なんなのかといったら、表はいいけど裏はいかんちゅうても、裏のない表はありようがない。光があったら必ず影があるのであってね、光だけの世界には光は存在し得ない。影があって初めて光が存在する。悪がなかったら、何が善かわからないんだ。善があったら必ず悪はあり、悪があったら必ず善がある。お互いにお互いがその存在を必要としているというね、そういう関係性にすべてのものがあるわけで、美しい人がいないと、醜い人は出てこない。醜い人がいないと、誰が美しいかわからないとかですね。とにかくそういうことで、お互いがお互いの存在を支え合ってるというのは、そういう構造にこう、なってるわけですよね。**

**人間でも、長所、短所、半分ずつあって人間なのであって、長所ばかりの人間はいない。短所ばかりの人間はいない。また同じこの現象でもですね、両義性といってですね、プラスにもマイナスにも評価できるという、そういうこのことがあってですね、あの人はなかなか信念のあるですね、この立派な人だというように評価する人もおるけども、その同じ人をですね、頑固者やといってですね、融通が利かんちゅうて非難する人もおるわけですね。同じ現象がですね、プラスにもマイナスにも評価できるというね、そういうふうなこのことがある。そういうふうなことをですね、ちゃんとこう理解していくと、人間の大きさができてくる。自分がですね、ある人のことをですね、あいつは本当にいいかげんで、どうしようもないといってこう、言ってると思えばね、それを意識を変えればどうなるかといったらですね、なかなか融通は利いて、寛大な人やと。とも言えるんやということになってくるわけですね。**

**そのいいかげんでですね、どうしようもないってこう、そういう目で見てる意識をね、持ち続けておったならば、その人との人間関係は壊れますからですね、同様の現象が違った目で見れば、違った意識で見れば、同じことがですね、寛大で、融通が利くというふうなね、そういうふうな、その理解の仕方もしてあげることができるんやというのが、人間の大きさになってくるわけですね。それを両義性ちゅうんですね。いろんなものがプラスにもマイナスにも理解できる。あらゆるものは両義的であるというね、そういうふうに、この捉える必要があるわけですね。親切な人やとこう、自分は思ってるけどね、また違う人は、その人をおせっかいで嫌やというふうにこう言う人もおるわけですね。親切がおせっかいになってしまう。おせっかいということは、裏を返せば親切なんやというね、そういうことの両面からものを見ることができるということが、その人の人間の大きさをつくっていくことに、また非常に大事な原理であります。**

**対存在の原理というのは、そういう両義性というものもですね、内容として含んで対存在なんですけども、とにかくは、あらゆるものは対という構造で成り立っておるんだ。そのことによってですね、この清濁併せ呑むというふうなね、そういうこの言葉もですね、出てくることになって、それが人間の大きさというものを物語る言葉になるわけですね。両方共がなければならない。表があったら、裏があるのであって、裏のない表は存在しない。これはどういうことなのかといったらですね、この宇宙そのものは、そういうこの相対立する原理が共に力を合わせて、相互補完的な関係で成り立っておる。だから、人間は相対立する原理を共に両方とも生かさなければならないということなんですね。それが人間の大きさなんですよ。善人をも悪人をも生かせる力、真も偽も生かせる力、美も醜も生かせる力、長所も短所も生かし切ることができる力、表も裏も生かせる力。右も左も、上も下も、前も後ろも全部大事なんやと。それはどうしてかといったら、一対で全体なんだ。片方では、物事は食われてしまう。存在し得ない。一対で初めて存在してるんだ。一対で初めて現実なんだというね、そういう捉え方をするということが大きさのある人間。共に両方とも生かす。だから、人間においては、短所がいかん、長所だけにならないかんって、そういうふうなことを言ってるのは、ちっぽけな人間なんですよね。**

**長所を伸ばして、存在感のある能力をつくって、他人の役に立って、短所はなくさないで、短所があるから人間らしい謙虚な心がつくれるんだと。そして、短所の部分は助けてもらって、相手に感謝をする。助けてもらうということは、人間として非常に大事なことなんだ。助けてもらって、感謝をするということは、人間として美しい行為なんだと。助けてあげることは立派でも、助けてもらったら気が引けるというね、なんか借りをつくったみたいなことになってしまうというのは、これは小さな人間の考えであってですね、助けてあげることと、助けてもらうことは、同等の価値がある、素晴らしい行為なんだと。そういうふうに考えることができるっちゅうところに、また人間の大きさ、大きな心というのがこう、成り立つわけですね。そして、助けてあげることも、その立派なんだけども、助けてもらうことは、相手の能力を輝かせ、相手を評価する活人力だと。短所がなかったら、助けてもらえない。助けてもらうことも、相手を輝かせるために立派な人間的な、素晴らしい行為、美しい行為なんだと。短所がなかったら、助けてもらえない。だから、短所は必要なんだ。短所がなかったら、人間らしい謙虚な心はできてこない。だから、この長所はいいけど、短所はいかんという考え方はですね、この真実の考え方ではない。真実を理解した考え方ではない。長所はいいけど、短所はいかんというのは、理性によって人間に完全性を求める真理の立場の考え方である。**

**理性は人間に完全性を求める。だけども、宇宙はそういう存在の仕方をしておるんじゃない。宇宙はマイナスのエネルギーとプラスのエネルギーが互いに同等の価値を持って関わり合いながら、宇宙の秩序をつくってるという、そういうこの関係性なんだ。だから、政治でも与党と野党がいる。これは両方ともが必要なんですね。だけども、現実のこの与党、野党というのはですね、宇宙の摂理に反するような、対立という構造になってしまっておる。だけど、本当には、宇宙の摂理を反映するならば、与党と野党は相互補完的な関係にあると考えなければならないのであって、お互いが対立を通して相手から学び合って、自分の気が付かないところを相手から教えてもらう。そういうふうにして、お互いにこの成長していこうという意欲を持って関わるところにですね、この与党と野党というものが、相互補完的な関係で、お互いに気が付かないところを教え合って、そして、この国政に対応していくという、そういうこの姿になっていなければならないんだけども、現実的には対立をして勝ち負けを争ってる。これは明らかに、この対存在の原理、宇宙の真実から外れた関係性、外れたあり方だというようにね、言わなければならない。**

**悪人というのは、現実の社会のどこに問題があるのかということを教えてくれるために存在するんだ。人間はべつに悪いことをしたくてするんじゃない。だけども、現実に何かしら問題があるということを反映するようなですね、そういうこの生き方になってしまう人もおるわけですね。半分はそうなんだ。半分の人間は、現実に何か問題がある。現実の足らんところをですね、自分の生き方において示すという、そういう立場にですね、立たされてしまうのが、人間のこの対存在というですね、あり方で宇宙は成り立っておる、そういう宿命的なもんですね。失敗する人もおるし、成功する人もおる。失敗するということは、何かしら、そこに問題があるということをね、この教えてくれてる。だけど、失敗は決してマイナスではない。失敗があることによって、そうしたら失敗するっちゅうことがわかってくるんだから、それとは違う方法でまたやってみようというね、そういうふうなこの創意工夫というか、改良改革というのが進んでいくと。失敗も対も全部、何か問題点をですね、教えてくれるという、そういうこの働きをしてるんだ。だから、失敗した人間を責めたらいかん。そのことによって、みんなが気付きをいただくというね、そういうふうなこの対応の仕方をしなければならない。宇宙には無駄がない。この世に起こることに全部、無駄がない。光も影も大事。昼も夜も大事。**

**いったい夜はなんであるのか。影はなんであるのか。そういうことをですね、ちゃんと考えていったならばですよ、この対存在という、この両方が大事だということがですね、だんだんとわかってくる。人間、起きてるあいだ、活動をしてますけど、寝ないとね、命が持ちませんからね。起きてる時間と寝てる時間は、釣り合いとして、半分ずつぐらいにこう、必要なんですよね。緊張状態ばっかりだったら駄目だから、半分はリラックスするね、そういうときも必要だ。そのバランスで命は持ってるんですよ。こういうこの対というね、あらゆるものは対という構造で成り立っておるということを知りながら、いろんなものに対応する、生きるということが、人間の大きさというものをですね、このつくる原理だ。両方とも生かすっちゅうことが大事なんですね。大きさのある人間というのは、両方とも生かすのである。両方とも大事だというね、そういうこの意識になれるかどうかなんですね。あらゆるものを自分の人生のプラスにしていくと。**

**もうちょっと具体的に言わないと、なかなかわかりにくいかもしれませんけども、誰かこう、失敗した場合でもですね、それをただ失敗したその人の責任を責めるというですね、そういうことをするんじゃなくって、失敗したということは、その人だけの問題じゃなくってですね、その失敗ということに関係する、その組織のいろんなシステムのあり方とかですね、また、その人に対する関わりの仕方とかですね、いろんな面で、その組織としては成長のために考えなければならない問題点をその人が教えてくれたのであって、失敗する人が出てこなかったならば、その組織の問題点に気が付くことをさせてもらえなかったというね、そういうふうなこの受け止め方をしながらですね、その失敗も生かしていくというね、そういうことをしなければならない。**

**病気というのも、これは病気にならなければ、その病気になった人の本当の気持ちがわかってあげられない。病気も、やはりプラスだというね。そういうこの受け止め方をすることによって、病気で気を病むよりは、病気によって自分が成長できるという喜びを持ったならばですね、それはその人の病気が治る、生命力を高めていく、自然治癒力を高めていく働きをするわけです。病気と対立して、病気を嫌だなと思うその心は病んでますから、病気は治りません。病気を本当に治したいと思ったならば、その病気をさせてもらって、そして、そのことによって何を学んだかというね、そういうことを自分が喜びとして感じていくことによって、病気は治り始めます。これはもう医学的にですね、証明されたですね、この心療内科的な治療方法であります。実際問題、多くのですね、末期がんの方々はですね、あと３カ月の命というところから立ち直ってですね、がんがあっても健康だという状態にまで回復するという例は、いっぱい世界から報告されてるわけですけど、それは気の病を治すところから、そのがんを克服されるんですね。積極的にその人がそういう力を持ってない場合にはね、そのがん患者に対して、感動させたり、笑わせたり、泣かせたり、そういうふうなことをさせてやったり、あるいは、その人が本当にしたいことをさせてあげる。命に喜びをつくってあげると、がんは治る、病気は治るんですよ。自然治癒力は高まってくるんですね。その反対に病気になって、その病気をなおさら、気を病んだらね、ますます病気はひどくなりますし、治りません。**

**とにかくこの宇宙には無駄がない。あらゆることを自分の命に喜びとし、あらゆるものを自分の命の成長に変えていく。あらゆる環境を自分にとってプラスのですね、そういうものに変えていく。あらゆる事実を自分の人生にプラスになるように解釈していく。あらゆる環境を自分の人生にプラスになるように解釈していく。あらゆる現象を自分の人生のプラスになるように解釈していく。そういう努力をするとですね、この人間は、大きさのある、より輝いたですね、命に成長していくことができる。マイナスをもプラスに解釈していくというね、そういうことが実際に可能なんですから、先ほど申し上げたように、おせっかいな人やというふうに思ってると、それを反対から見れば、親切なんやというね、そういうこの受け止め方をしていくことによって、自分の気の病が治るわけであります。おせっかいで嫌な人やという気持ちを持っておったら、自分は心が病んでるんですよ。そうじゃなくって、親切でええ人やと思ったら、自分の心は健康になって、明るくなってですね、そして、その自分が幸せになるわけですね。**

**同じことでも、いかようにでも解釈できる。それは両義性といってですね、そういう両義性というものがあるから、われわれは自分を幸せにすることができる。真反対の解釈ができるんだっちゅうことですね。それが人間の大きさなの。それができるという力を持ったとき、その人間は大きくなったんですね。叱られたら嫌やとこう、思うのとですね、叱ってもらって自分は成長できるんやと思う受け止め方をすれば、自分の命は喜びますからね。これ、随分、自分が幸せになるか、不幸になるかを決める大きな要因なんですよね。叱られたら嫌やっていう気持ちを持っておったら、叱られれば、自分は不幸で、嫌な感じですけど、叱ってもらえた、叱ってくれるっちゅうことは、自分は成長できることなんやとね、そういうふうに自分が解釈して受け止められれば、叱ってもらうことも自分の喜びになってくる。ああ、よう叱ってくれたなといってですね、その叱ってくれた人に、お、この感謝や、あるいは尊敬の目で、その叱ってくれた人を眺めるというような、そういう力を持てば、叱った人よりも、叱られた人のほうが、大きな人間になってしまったりするわけですよね。そういうふうなね、受け止め方ができていくことになるのが、人間の大きさというものの素晴らしさであります。**

**とにかく基本的に、あらゆるものは対という構造で成り立っておるのであってですね、両方とも認めて、両方とも生かさなければならないと。あらゆるものは、相互補完的な関係である。あらゆるものは、プラスにもマイナスにも解釈できる。だから、プラスに解釈しなければ損だ。そういうふうなですね、意識になることが、精神的な原理からいって、人間の大きさをつくっていくという方法なんですよね。この図面はですね、ある現象に対して求心力的にいろんな見方ができるという図表ですけども、これはまた反対のですね、ベクトルもあるのであってですね、建築学の勉強をしたら、建築会社に就職せんことにはいかんというふうに思っておったら、これはちっぽけな人間なんですね。建築会社、建築の勉強をした人間にしか書けない小説があるやろうと。建築の勉強した人間にしかできない鉄鋼の仕事もある。建築の勉強した人間にしかできない写真の仕事もある。建築の勉強をした人間にしかできない保険の仕事もある。現実に存在するあらゆる職業に建築学を勉強したということの価値は全部生かせるんだというね、そういう理解の仕方をすることも人間の大きさなんですよ。**

**これも、こういうこの求心力的なですね、方向性に、この理解の仕方を持っていくのと同様に、また遠心力的な方向性にですね、理解の仕方を持っていくというのを、これも対というね、そういう両面から物事を考えないかんという、この構造があるということの、一つの例というかね、考え方なんですよ。そういうふうにこう、右左ということもあるし、また、遠心力、求心力というね、そういうこともある。とにかく、対というね、その両面が常にあるっていうことをですね、意識しながら生きるということによって、人間をどんどん、どんどん、いろんな幅でのですね、大きさができてくるっちゅうことになるわけですね。空間的な大きさ、空間的な全体性ということからするならばですね、そういうこの２つの原理、どこまでの大きさの世界を意識しながら生きておるかっちゅうことと、あらゆることは、この両義的であり、あらゆるものは対という構造で成り立っておって、両方ともを認めて、両方ともを生かしていくというですね、そういうふうな、この意識でいろんなことに対応しなければならない。片方、認めて、片方、否定するっちゅうことは、自分がちっちゃくなることなんだと。そういうふうなですね、考え方で、生き始めれば、意識の面から自分を大きな人間に成長させることができるということですね。これが空間的な全体性から、人間の大きさをつくる精神的原理であります。これからちょっと、10分間ほどですね、休憩して、あと、今度は精神的、時間的全体性という観点から、この人間の大きさをつくる原理とはなんなのかということを、次にお話したいと思います。どうもありがとうございました。**

**（休憩）**

**芳村：それでは、後半の部分の、時間的全体性という観点から、人間の大きさをつくる原理をお話をしたいと思います。この時間的全体性というのは、これは現在、過去、未来というね、そういうこの時間の幅が、その時間的全体性であります。現在、過去、未来というと、渡辺真知子さんのね、歌に、現在、過去、未来というね、歌がありますけど。その現在、時間というのはですね、多くの方が、過去から、現在から、未来へとこう、一直線にすっと流れておるというふうにね、考えてらっしゃることが、方が多いんですけど、だけども、現実的な、具体的な時間というのは、現在から未来へ、現在から過去へと流れるというね、そういう構造を持っております。生きた時間っちゅうのは、今という一瞬しかないので、その生きた時間と、今という一瞬から、未来へと、過去へと流れるというね、そういう構造が時間の構造なんですね。だけども、科学的にいわれるこの時間の流れというのは、ずっと一直線にね、過去から現在、未来へとこう、すっと流れていくって、そういうふうな単純なですね、時間の意識を持ってますけど、哲学的には、時間というのは、時間というのは、今しか存在しない。時間というのは、今を原点にして、未来へと、過去へと流れるというね。そういう構造で、この時間の幅ができてくるわけですね。そのことによって、過去も現実に影響を与える、過去も現実によみがえり、また未来も現実に生きて、現実を動かすという、そういう構造になるわけなんですね。**

**で、まずはですね、この現在から未来へという、この時間の幅ですね。この時間性というものをこう原理にして、人間の大きさをつくっていくためにはどうするかということからお話をしますと、現在から未来へという、この時間の流れというのを原理にして、人間の大きさをつくっていく第１番目はですね、そのレジュメに書いてあるように、どこまでの未来を意識しながら、今を生きているかによってですね、人間の大きさは決まる。すなわち、明日のことしか考えないで、今日を生きてる人間と、10年先のことを考えながら、今日を生きてる人間と、100年先のことを考えながら、今日を生きてる人間と、500年先のことを考えながら、今日を生きてる人間とは、全然、今を生きるですね、人間の意識の大きさが違うということになってくるわけですね。明日のことしか考えないで、今日を生きてる人間というのは、言ってみれば、刹那的な生き方というかですね、今、楽しければいいみたいな、そういうふうな感じでですね、この今を生きてしまってる。だから、自分の幅が狭いから、その人間もちっぽけやっちゅうことになるわけですね。だけど、10年先のことを考えながら、10年先を意識しながらですね、今を生きるということは、それなりの長い10年という先がありますからね、それだけのことを意識しながら、今を生きるっちゅうことは、必然的にですね、意識の幅ができてきて、そして、この意識の広がりができてきて、そして、この自分の気持ちがですね、目が相当、先にいっておるような、そういう状態で、今どうすればよいのかということを考えるからですね、だから、相当この大きさのあるね、生き方になってくる。**

**とにかく、どこまでの未来を意識しながら、現実を生きるかということは、現実の生き方を変えてしまうんだっちゅうことですね。刹那的な生き方という、そういう一瞬、喜んどったらええという、そういうところからですね、10年先のことを考えながら、今を生きるっちゅうことは、喜びのその時間が長いというかですね、その10年先の楽しみをずっとこう、持ち続けて、そこまで生きることができるっちゅうことになりますので、その意味においても、心の豊かさというかですね、その心のありようが、非常にその内容が豊かになってくるわけですね。とにかくこの意識の幅、広がりというものをですね、つくっていくために、まずどこまでの未来を意識しながら、現実を生きておるかということをですね、ぜひ考えてもらいたいと。この家の場合でもですね、子どものことを考えてるだけじゃなくって、孫のことも考えながらですね、自分がどう今を生きるかっちゅうことを考えたりね、そういうこのことをすると、百年の計をもって現実を生きるというのは、そういう、生き方になってきたりするわけですよね。**

**そうすると、金の遣い方でも、随分違ってきますしね。どんだけ貯金しようとかですね、どういうふうに、この家のですね、建て替えなんかでも、孫の代まで持つような家を考えようとかね、いろんなそういうことで、この人間の行動が違ってきますよね。そのことによって、心の豊かさとかね、この人間性の豊かさとかですね、そういうものが確実に違ってきます。今日さえ面白ければいいというね、そういうふうな刹那的な生き方では、考えることが非常に浅くって、しかも、この刹那的というかですね、あまり周りのことを考えないで、自分本位ということになりますけども、相当先まで考えるっちゅうことになってくると、いろんな、やっぱりこの人へのですね、思いも出てきますし、いろんなつながりが出てきますので、それだけ自分の心の世界の、広がりというかですね、豊かさというか、いろんなことに意識を使うということによって、人間性のこの心遣いの広がりがですね、その人の心の中の複雑性、複雑な、豊かな、そういうこの内容をつくり出していきますので、それだけ、その人は大きな生き方ができてるということに、なるわけですよね。このどこまでの未来を意識しながら、今を生きておるか。この時間の幅が、その人間のこの大きさというものをですね、決定するという、そういうこの原理があります。**

**２つ目はですね、どこまで先が読めるかですね。これは先見力の問題である。どこまでの先を意識しながら生きておるかということとですね、どこまでの先が読めてるかっちゅうことで、またちょっとこれ、次元の違う問題で、将棋とか碁なんかでもですね、何手先まで読めるかによって段位が決まってしまうんですよね。こうきたらこうする、こうきたらこういくっちゅうてですね、もうそういう手をずっと読んでいくことによって、もう勝負が付くまで全部見えてしまってるというようなね、そういう仕方でこう、この現実を生きるというと、現実を生きる確かさがまたできてきてですね、その先見力を持つことによって、今を生きる確かさが生まれてくると。この未来を意識しながら生きるっちゅうことはどういうことなのかと。今の生き方を変えていくということなんですよね。未来というのは、先の話じゃなくってね、未来というのは、先の話じゃなくって、未来というものについて考えてるのは、今、生きてる人間ですから、未来というものは、時間的な構造からいうと、未来というのは、この現在のただ中にあり、未来も現在だというふうにね、言うことができる。未来について考えるっちゅうことは、今の自分の生き方を変えていくこと。今の自分の生き方をより豊かにしていくこと。それが、この未来について考えるということに、なってくるわけですね。しかも、今を生きる確かさというものをつくっていこうと思ったならば、この先見力、どこまでの先を読みながらですね、その今を生きるかという、この先見力というものが、また大事になってくる。どこまで確かなこととして、自分が未来のことをですね、知り得るかということですね。**

**必ずこうなるんやというですね、そういうこの確定的な未来というのがちゃんと見えてくれば、今、自分がしなければならないことというものがはっきりしてきますから、それだけ確かなですね、この生き方ができる。しかも、どこまで先が読めるかというですね、遠くまで先が読めてるほど、その今を自分が生きる、その自信とかですね、また影響力というのは、非常にこう違ってきますので、その面からもですね、この人間としての大きさというものを示すことができます。影響力というのも、これもやっぱり、ある意味で人間の大きさにですね、どれほどの範囲の人に影響力を与えることができるか。未来を読む確かさというものがですね、こうだからこうなるんだという根拠がちゃんと出てくるとね、それだけ、やっぱり人に影響を与えることができます。こうなるかもしらんという程度のことじゃですね、あまり人は付いてきませんけど、根拠をちゃんと示すような、こうならざるを得ない、こうなるはずだ、こうなるんだとこう言ってしまうと、なんとなくカリスマ性が出てきたりなんかして、多くの人にね、影響を与えながらですね、多くの人をリーダーシップを持って引っ張っていくという、そういう力が出てくるわけですね。**

**社長さんなんかでも、こうすりゃこうなるんだという、そういうね、指導力を発揮してですね、自分が体験的にも、また学問的にもつかんだ根拠というのを明確に持っておったら、強力な指導力をもって人を引っ張っていくことができるんですね。これはやっぱり人間の大きさであります。これは仕事の面において先を読む先見力ですね。こうすればこうなるんだというね、その結果がちゃんと見えてるというですね、そういう状況で仕事をするっちゅうことは、非常に安心感がありますしね、ものすごく確信を持てますしね、そのことによって、強力な指導力、統率力というのが生まれてきます。これが先見力というね、先を的確に読む、わかるというですね、そういう力を用いた人間の大きさということになってくるわけですね。どこまで先が読めるか。何手先まで読んでるか。これは非常にこの人間の大きさをつくる、また大事な原理です。先見力。**

**この先見力をどうつくるかということもですね、これは非常に大事なこの問題になってくるわけなんですけども、この現在から未来への時間性ということとですね、それから、現在から過去への時間性という、この両面から、このレジュメには書いてあるわけですけども、これを一対のものとしてね、これは考えなければならないので、どこまでの未来を意識しながら、今を生きているかということと、どこまでの過去を意識しながら、今を生きてるかっちゅうこと、これは一対の問題なんですよね。このどこまでの過去を意識しながら生きてるかということがですね、このどこまでの未来を意識しながら生きてるかということとですね、この一対になって、そして、この人間の大きさというものを確かなものにしてくれる。未来だけを見ておったのではですね、本当には未来というのは見えません。やっぱり、過去というものを意識することによってですね、初めて未来を見る確かさというものが、こう生まれてきますので、その意味では、ここでは別々に書いてありますけども、この現在から未来への時間性ということと、現在から過去への時間性というのは、これは相対称というかですね、一対のものとして組み合わされて考えていかなければならないものなんですよね。**

**ですから、別々に書いてありますけど、一応、一対のものとしてですね、お話をしていきますと、現在から未来へという観点から人間の大きさをつくろうと思ったら、どこまでの未来を意識しながら、今を生きてるかっちゅうことが大事なんだけど、現在から過去への時間性ということを考えるならばですね、どこまでの過去を意識しながら、今を生きてるかということがですね、また大事になってくると。これは昨日のことしかですね、意識しないで今日を生きてる人間と、明治時代から今日のことを意識しながら生きてる人間と、この奈良時代から今日までのことを意識しながら生きてる人間と、人類が始まって以来から今日のことを意識しながら生きてる人間と、地球が始まってから今日のことまでを意識しながら生きてる人間と、全然その人間の生き方なり、価値観なりですね、その物事の理解の仕方が全然これは違ってくるんですよね。そういうこのどこまでの過去を意識しながら、現在を生きてるかということが、この土台となってですね、そこからこのどこまでの未来を意識しながら生きるかという、そういうこの未来へのですね、見通しというかですね、どこまでの未来を意識しながら、現実を生き切るという、そういう気持ちになるかということもまた決まってくるということにこうなってくる。**

**この現在から過去へ、現在から未来へという、この意識の幅がですね、その人間のこの意識の大きさというものを決定しますので、そのことによって、その人間の大きさがまたできてくるということになるわけですね。こういうこの時間の幅っていうものをつくっていくためにもね、そこで人間にとって、非常に重要になってくるのは知識です。過去についての知識というものをですね、現実にこう踏まえて、そこからこう未来への知識、未来へのさまざまな思いというものが、またこう、湧いてくるというね、そういうこの構造になるので、単にその未来へのですね、この意識というものを自分がつくろうと思ってもですね、それは根拠のないようなことになってきますので、過去というものについての理解というものを踏まえてですね、未来というものを考えていくということが、土台、根拠を持ちながら、未来というものを見つめていくというふうな、そういうこのつながりになってくるわけですね。これは一対のものとして考えておいてもらいたいと思います。**

**そこで、その次のですね、どこまでの先が読めるかって、先見力というのは、どうしてつくっていくかといったら、これはどこまでの過去が読めるかという歴史観というものがですね、その根底になって、初めてどこまでの未来が読めるかっていう力がつくられてくるのであって、歴史観なしには、先見力は生まれない。だから、碁とか将棋なんかでもですね、どこまで先が読めるかという、その力というのは、過去の棋譜を研究する。過去のですね、名人たちが打った、その過去の戦いのですね、を振り返ることによって、こうきたら、こういうふうに打つんだ、こういうふうに打ったら、こう出てくるんだというね、そういうことをこう、勉強することによって、過去の棋譜を振り返りながら、それを勉強することによって、自分がこう出たら、相手はこう出てくるであろう。相手がこう出てきたら、自分はこう打ったらいいというね。そういうふうな形でこう、先が読めるというかですね、そういうふうなこの能力のですね、成長がもたらされる。その意味で、現実的には、歴史観というものをどういうふうに自分が持つかということがですね、先を読む力というのをどうつくるかということに、関わってくるわけですね。**

**私の場合のこの感性論哲学においてはですね、歴史観というのはいったいどういうことなのかといったら、今、人類の文明の中心は日本の真上にあると。これは人類の文明が始まって以来、どういうふうなですね、この流れでですね、世界の文明は歴史的に進歩してきたのかということをたどっていくとですね、この今、日本の真上に世界文明の中心があるっちゅうことがこう、わかってくるわけですね。これは世界の文明、人類の文明が始まったのは、アフリカ地方の大地溝帯である。そのアフリカ地方の大地溝帯から、人類の文明は始まってですね、そして、どういうふうに動いたかといったら、アフリカ地方から北部のエジプトにいって、それから今の中東地方のメソポタミア地方にいって、それから地中海、ヨーロッパ、イギリス、アメリカというふうに世界文明の中心を担う国家はですね、移り変わってきた。そして、アメリカはいまや衰退する国家である。そして、これからはアジアが燃える。アジアの入り口は日本だ。だから、今、日本の真上に世界文明の中心がある。だから、今、日本人は大金持ちなんだ。不況だといってもね、生活に困ってる人はそんなにいない。日本人は世界一の貯蓄高があり、また日本は世界一の貿易黒字を上げておる。そして、日本は国家的にいってですね、一銭も借金がない。日本だけが一銭も借金はない。日本は世界に金を貸しまくっておる。アメリカは世界最大の債務国であって、日本は世界最大の債権国である。**

**そういう状況を見てみるならばですね、いまや世界文明の中心を担い得る、経済的基盤を持っておる者。また、この伝統的な文化の価値を持っておる者は、アジアの中で日本しかないと。今、日本の真上に世界文明の中心はあるんだ。中国やインドや他の東南アジアの諸国はですね、世界文明の中心を担い得るような、そういう能力も、また文化の伝統も、また財力もないと。その意味で、今、日本の真上に世界文明の中心があるんだ。そういうこの歴史観を持ってくるとですね、歴史の流れが相当先まで見えてきまして、日本の次には中国、中国の次にはインドというふうにですね、文明はこう開けていってですね、そして、アジアの時代が形成されていく。そして、このインドに世界文明の中心がいくころには、地球には世界政府ができておって、インドからどこにいくということはなくって、インドまでこの世界文明の中心がいったときには、地球は一体化しておって、そして、人類は宇宙を舞台に生活し始める。そういう状況になっておる。そこまでもうちゃんと、こう見えてきてしまうわけですね。そうならざるを得ないということがですね、ちゃんとわかってしまうわけであります。**

**それと並行して、政治はどういうふうに変わっていくのか、経済はどう変わっていくのか、社会はどう変わっていくのか、文化や文明はどう変わっていくのか。それは全部、手に取るようにですね、千年以上先までちゃんと見えてしまうというね、そういうふうなことになってくる。これがこの人類の文明が始まって以来、今日に至るまでのですね、その人類の歴史というものをどういうふうに解釈するかという力がちゃんとできてくると、それに従って、この相当先まで人類の行く末が見えてしまうというね、ことに、なってくるわけであります。そういう、歴史観を持ってしまうとですね、今の人類は、まだ人類史において、人類史が100年とすれば、まだ人類は12～13歳というね、そういう年齢にしか達していないというようなこともちゃんとわかってきてですね、まだまだずっと先があるんだというようなことがね、わかってきてしまうわけですね。ていうのは、その人類に今、与えられてる潜在能力というものは、まだ約１割ぐらいしか使われていないと。アインシュタインレベルでもですね、３割弱のですね、能力しか使っていない。普通の人間は、１割そこそこの潜在能力しか使っていない。人類には、まだ７割から９割のね、潜在能力が使われないまま、この命に潜在してるんだ。だから、まだまだ人類の歴史はですね、何万年、何十万年と続いていくっちゅうことがですね、そういうところから、この見えてくるわけであります。**

**だから、そのプロセスにおいてはですね、約一千年ぐらい先になればですよ、確実に人類は火星とか、月とか、いろんな天体をですね、地球と同じ環境にしてですね、そして、なんか変なものを付けなくてもですね、この地球で生活するのと同じように、火星で生活したり、月で生活したりすることができる、環境を変える力を人類は持つであろうと。そして、『銀河鉄道999』とかね、あるいは『キャプテンハーロック』とかね、ああいうふうな、このアニメや漫画で描かれてるようなSFの世界がね、必ず未来は実現されてくる。そして、宇宙が人間の生活空間に入ってくる。いうところまで、もうちゃんとこう、わかってしまうわけですね。それはインドにまでね、この文明の中心が移っていったならばね、必ず人類は宇宙を生活空間に取り入れながら生き始める。その能力とですね、またそれにふさわしい、この意識の広がりというものをですね、人類は獲得していくはずなんだと。そういう未来がずっとこう、読み取れてくるわけですよ。そのときには政治はどうなってる、そのときには経済はどうなってる。これは、去年かおととしかぐらいに、ここでも話させてもらった感性論哲学の歴史観、この21世紀における日本の使命というね、そういうこの話の中で、そういうこともかつてここで話させてもらったんですけども、とにかくそういうふうなですね、先見力というものが、この歴史観というものをちゃんと持てば、必然的に出てくるというね、そういうこの構造になるわけであります。**

**昨日、選挙が終わって、ようやく何かしら、この動きが見え始めましたけどね。得票数からいったら、民主党がですね、自民党の得票数を政党に対する投票の観点から言えば、上回っておるようなね、状況が出てきたりですね、大きく政治の政界地図がですね、この塗り変わり始めた、動き始めたという、そういうこの状況が、政界の底辺のですね、流れからは見えてきました。だけども、彼らは二大政党政治を目的にしてますけども、だけども、将来は必ず政党のない政治が実現されていくと。政党がある限りは、この議員が数になってしまう。政党が存在する限りは、数の暴力というね、この政治から脱却できない。数さえ集めたら勝てるという政治から脱却していかなければ、本当の政治改革はあり得ない。将来は、政党が政治を動かすんじゃない。政党とは違ったものがですね、政治を動かしていくという、そういう政治形態がつくられていくはずだし、また、そうなるんだということがですね、感性論哲学からは言えるわけであります。**

**そして、現在は、われわれは多数決原理というね、数で物事を決めてしまうという議決方法を最高のものとして持っておるわけですけど、将来は、数を集めれば勝てるというような、そういう多数決原理は、もう過去のですね、低級な、低い議決方法っちゅうことになってきて、そういう数を原理にしない、質的なですね、数から質へと今はいろんなものが変わってきますので、質を重視したような、そういうこの議決能力というものを人類はこれからつくっていかなければならないと。それはなんなのかっちゅうこともね、この感性論哲学ではちゃんとこう、示しておるわけですけども、そういうふうにですね、この政治はどう変わる、経済はどう変わる。それも全部ですね、歴史観をちゃんと持てば、先がはっきりと見えてしまうという、そういうこの構造になるわけであります。**

**ですから、この建築の世界においてもですね、建築の世界の未来というものを見通そうと思ったならば、建築の歴史を読まなければならない。読むというのは、本を読むんじゃなくって、建築の歴史というものをですね、どういうふうに解釈してですね、そして、そのこれまでの建築のですね、様式の変化というものから、どういうふうに未来の建築は変わっていくのかということを先取りしながら、新しい家の提案を消費者にしていく。そういう力を持たないと、建築業界の覇者にはなれません。その意味でもですね、この先見力というものを仕事においてつくっていこうと思ったならば、時間的なですね、この流れから、歴史観というものを明確に持って、仕事をしていく。そのことによって、業界の指導者になっていくという、そういうふうなですね、この生き方をわれわれ、志さなければなりません。確実に過去からね、現在を振り返れば、建築様式は変わってきました。それはどういう、この終局に向かってですね、建築様式が変わっていくのかということは、過去からの流れをね、解釈して、読み取らないとですね、一歩先という未来を見通すことは的確にはできません。流行のあとから、のこのこ付いていくという、そういう惨めったらしいですね、仕事の仕方じゃなくって、自分たちが、世界に新しい建築様式を提案していくんだと。自分たちが世界をリードするんだ。当然、日本は将来、そういうことにならざるを得ない国家なんですよ。**

**あらゆる分野において、最も素晴らしいあり方を日本人が世界人類に示していく。そういう時代が来るんですよ。それが日本の正義ですからね。日本が世界の文明の中心を担おうということは、建築業界においても、日本の建築業が世界の最先端に立つ。そして、建築はこうあらねばならない。こういう素晴らしい建築の可能性があるんだ。そのことを全世界の建築業者に教えていってですね、そして、この住環境の発展というかですね、より素晴らしい住環境を提案していくということを、していかなければならない。そのためには、今の建築が持っておる問題点はなんなのか。それを知ってですね、またどういう価値観で建築というものをつくっていったらよいのか。そういうこともですね、この歴史観というものを背景にして、未来を読もうとすれば、確実に見えてくる、この結果なんですね。そういう大きなね、この理想というものを未来に掲げながらですね、的確にその未来へと一歩一歩、進んでいこうと思ったならば、そこにこの根拠を持った先見力というものが要求されてくるわけですね。そんなこともね、この考えながら、生きなければなりません。そういうことを考えておるとね、なんとなく人間は大きくなってくるんですよ。その人のあとからのこのこ付いていってるようじゃね、なかなか大きさは出てきません。誰もまだ見えない、誰もまだ見えない未来が見える。そういうこの意識でね、現実を生き始めるとですね、とんでもない大きさのある人間になります。これが先見力というものが大事だということのですね、意味であります。**

**３番目はですね、３番目は理想の大きさということですね。理想の大きさ。理想の大きさというのは、過去へのロマンと一対を成すものなんですね。まずその人間の大きさというものをつくっていこうと思ったならば、どれだけの大きな理想というものを未来に掲げておるかということが、この問題になってくると。理想といってもですね、いろんなレベルがありますからね、だから、どれほどの大きさ、あるいは、どれほどの高度さ、どれほどの厳密さというね、そういういろんな尺度があってですね、そして、その理想の大きさ、高度さ、厳密さ、そういうものがこう、整ってくるにしたがって、理想というものは人間の大きさをつくっていく力にこう変わってくるわけですね。だけども、理想は持ってもね、多くの人は理想に押しつぶされてしまってですね、理想があっても、それがなかなか実現できないというふうな、そういう状況に陥ってしまってる人もいる。理想はあるんだけど、できたらいいなというぐらいの理想でですね、どうしても俺はそれを実現したいんだ。し抜いてみせるぞというような、そういうふうなですね、この強力な意志にまでこうなってきてない。できたら、こうなれればなという、そういう理想ではですね、これは人間の大きさはできてきません。理想というのは現実を動かす力ですから、行動力にまでそれが変わってこないと、理想というものは人間の大きさをつくりません。**

**そのためにもですね、この理想というのは、命からね、命から湧いてくる欲求として、理想というものを自分が持つということが、非常に大事であって、欲とか、命から湧いてくる力とですね、結び付かないと、理想というものは、人間の大きさをつくる働きはしません。観念だけではですね、観念だけでは、この理想というものも、絵に描いたもちであってですね、行動力と結び付きませんから、人間の大きさはつくってくれません。そのために、どういうふうにしてですね、自分の命からですね、自分の人格の大きさをつくることができるような理想というものを呼び覚ますことができるか。そのことをですね、考えなければならないと。その方法論として、前、お話をさせてもらいましたけどもですね、どんな人間になりたいのか、どんな男になりたいのか、どんな女になりたいのか、どんな仕事がしたいのか、将来どんな生活がしたいのか。そういうふうにね、考えながらですね、この自分の人生の未来に掲げる理想というものを、自分の命から引っ張り出してくるというね、そういうこの試みをしなければならない。**

**理想というのは、年齢が成長するにしたがって変わっていきます。それがその理想の発展、成長になるわけですね。10歳のころの理想と、20歳の理想と、50歳の理想とは違ってきます。それは自分の能力や、自分の人間性が成長するにしたがって、その理想の高みというのは、必ず違ってくるわけですね。またその実現可能性というものも、年齢によって違ってきます。あるいは、理想というもののですね、中には、使命感というものもありますから、人類が今、苦しんでおる問題があったならば、俺がなんとかしたろうやないかというふうな形で、理想をこの人類の悩みを俺がしょってやろうというね、そういうふうな形で、何かしら、自分の人生をつくっていく人もおりますしね。また、自分が今、生きてる社会の中に問題があるとすれば、俺がその社会のその問題を解決してやろうという、そういう仕方で、自分の職業を決めてしまう人もおりますしですね。そういうふうにして、この自分の身に降り掛かる、さまざまな不幸や悩みや問題というものを、俺がなんとかしたろうという、そういう意識で、自分の人生というものをつくっていく。そのために、問題から理想というものを自分がつかみ出すというね、そういう方法もあります。**

**それから、もう１つは、このどんな人間にもですね、顔が違うようにね、天分という、自分が世界一になることができる能力というのは、みんなこう、与えられておる。自分が世界一になることができる能力というものを見つけ出すことによって、俺はこの仕事において世界の頂点を極めたろうやないかと。全世界の同業者は、俺を目標に付いてくるんや。俺が世界の目標になったるんやってね、そのような感じで、この仕事で俺は世界の頂点に立ったるというような、そういう理想のつくり方もありますよね。それは天分というものをですね、生かすことによって、それはできるわけであります。とにかくそういうふうにして、より大きな理想というものを心に描くですね、またそういうものを実際に、この自分がつくり出すということができる、そういう方法論をちゃんと知っていないとね、理想の大きさというものが人間の大きさをつくるといっても、どうすれば大きな理想が自分でつくれるのか。その原理を知っていないと、それはつくれませんからね。その意味この理想をつくる方法論というものが非常に大事であります。実際、理想のない人間よりもね、理想のある人間のほうが、やっぱり人間としては大きいです。また、その理想でも、より大きな理想、より高度な理想、より厳密な、その内容を持った理想というものを持てば、またそれだけ、また大きさが違ってきます。そういうこともですね、考えてみてもらいたい。**

**それと同様に、今度は過去という時間性から、過去へのロマンということがあるわけですね。過去へのロマンというのは、過去にどういう夢を馳せるかということなんですけども、過去をただ歴史的事実としてですね、知るだけではなくってですね、過去の世界というものが、いかにも、今と同じように生きてですね、動いておるかのような、そういうこの状況で、自分がその時代を意識できるというですね、そういうところに、この過去へのロマンというものが、こう開けてきてですね、そして、その過去を豊かに自分が思い描く力というものを持つことによって、人間性の豊かさとかですね、あるいは、人間性の幅ができてきてですね、それがこの人間の大きさというものに関わってくるという、そういうこのことになります。ロマンというのは夢ですけどね、単に過去が素晴らしいというんじゃなくってですね、自分のこの命の土台となっておるね、そういうこの過去の時代というものがですね、過去の時代の素晴らしさというものをですね、自分が知ることによって、今を生きるですね、この自分の支えになってくる。**

**例えば、自分の過去にこういう立派な人がおった。自分の家系の過去にこういう立派な人がおったっちゅうことが、自分が今を生きるですね、その何かしら誇りになっていったりね、そういうことになってきますし、また日本の伝統、日本文化の伝統ということを知ることによって、そういうこの伝統が、自分の血の中に流れておる。そういう伝統のある文化を自分が持っておるんだということを意識することによってですね、自分の今の生き方に誇りができてきたりですね、あるいは、自信ができてきたりして、自分の人間としての生き方の内容が、非常にこのカラフルになるっちゅうか、豊かになってきて、非常にその意味を持って現実を生き切るというね、そういうこの力に変わってくる。過去をただ歴史的事実として知るだけじゃなくってですね、その過去の文化が持っておる意味や価値や値打ちや素晴らしさ、そのことに自分が目覚めることによって、また過去を立派なものと、素晴らしいものとして自分がこの描いていくことができることによって、今を生きる自分のですね、自信や、あるいは、心のこの豊かさといっていいのか、自分の過去にこういう素晴らしい文化があったということを知ることによって、何かしら自分に誇りとかね、自信がこう湧いてくるというふうな、そういうつながりが、こう出てくるわけですね。**

**実際問題、その過去をね、とんでもない古い、中国よりも、もっと古い時代に、日本人はこんな素晴らしい家を建てとったんだってね。その8,000年も前に日本人は、こんな太い柱をもって、こんな大きな建築をつくっておったんだっちゅうことがわかってくるとね、なんとなく、今を生きてる人間でも、自分の民族の歴史に誇りを持ち始めるんですよね。それが今を生きる人間のですね、生き方に自信を与えてくるというかですね、誇りをこう、与えてくるような、そういうこの関わりが必ず出てきます。過去を知ることは、今を生きる自分の力に変わってくるみたいな、そういうことになってくる。反対に過去が、今、日本がいわれてるように、日本人は戦争中には侵略者だったとかですね、何人も人を殺したんだとかですね、また、戦後、エコノミックアニマルで、もう金もうけのことしか考えてなかったんだと。そういうこの否定的なことばっかりこう出てくると、なんとなく自分に自信がなくなってくるっちゅうか、誇りがなくなってくるというか、自分自身がなんか嫌やなという感じにこうなってきたりするんですよね。**

**なんとなくこう、今を生きる喜びがこう湧いてこないと、だけど、歴史を振り返ることによって、こんな素晴らしい人がおったんや、こういう文化があったんや、もうこんな昔にこんなすごいものをわれわれの祖先は建てたんや。そういうことがいろいろわかってくるとですね、なんとなく、今を生きる自分の自信、誇りにこう、つながってくる。これが、過去へのロマンというものがですね、つくり出す人間の大きさというものの原理なんですよね。そのために、われわれは、過去というものをですね、自分の意識の中に取り込んで、そして、過去をより豊かに表現するという、過去へのロマンというものをつくり出す、そういうこの必要性があるわけですね。この過去へのロマンと未来に掲げる理想の大きさというものがですね、一対になって、人間は自分自身の心の世界を非常に大きなものにしていくことができます。そのことによって、そういうことができない人間よりは、そういうことができる人間のほうが、とにかくとんでもなく大きいというね、そういう人物になることができるわけであります。**

**最後のですね、この項目ですけども、人間は最後には死ぬわけですね。それでまた、この過去からの時間性からするならば、どこかで人間は生まれてきたわけですね。この死という未来とですね、生誕という過去というものをどういうふうに自分の中にですね、取り込んで、どういうふうに自分が意識するかということによってもですね、人間の生き方の大きさ、小ささが別れてくるわけですね。まず、やがて人間は死ぬというこの死への自覚というものと、この人間の大きさがどう関わるのかということなんですね。この人間はやがてみんな死ぬ。だけども、やがて死ぬというのは、これは時間によって殺されるんですよね。人間というのは、文化をつくる動物というふうに、こういわれておりますから、自分の命を自然に死んでしまうまで待っとるっちゅうことは、これは自然死であって、文化ではない。人間はあらゆるものを文化たらしめるところにその価値がある。だから、われわれは、死さえも文化にしなければならない。死の文化とはなんなのか。それは、自分は時間によっておめおめと殺されない。死ぬときは俺が決めるんだというね、この死という時間性によって殺される。あるいは、交通事故で殺される。ウイルスに殺される。殺されるのをおめおめ待つような、そういうこの生き方は小さい生き方なんですね。**

**そうじゃなくって、死ぬ場所は俺が決める。死ぬときは俺が決める。死にがいのある場所で、死にがいのある死に方をするというね、そこに死の文化というものが生まれてくるわけであります。その世界最高の死の文化が、切腹というふうに、こういわれておってですね、日本人は死さえも文化にしたと。すなわち、死ぬ直前にですね、さらさらさらっと短冊に辞世の句を詠んでですね、そして、死を美学にしたと、こういわれてるわけですね。そして、その死ぬときは、自分で自分の命を絶って死ぬというね、そういうことのために切腹という、この文化をつくり出したんですね。この切腹とはいったいなんなのかといったらですね、これは他人によって殺されるんじゃなくって、自分の死に方は自分で選ぶというね、そういうふうなこの表現なんですけども、だけども、その背景にはいったい何があるのかといったらですね、このためにだったら俺は死んでもいいと思えるものを持ったとき、人間は自ら命を絶てるというね。そういうこの力を持ってくる。だから、人間が本当にその素晴らしいですね、大きさのある生き方をしようと思ったならば、俺はこのためにだったら死んでもいい。死んでもいいと思えるものを持ったとき、人間は死を文化たらしめた。死の文化を自分が持ったと、こう言えるわけなんですよね。**

**このために生きて、このために死ねたら本望だ。そういうこの生き方をする人間が、大きくなる人間だと。その意味でですね、自分はいったいなんのためなら死ねるだろうかというね、そういうこのことを意識しながらですね、自分の生き方というものを求めていかなければならないと。私は、松本零士のね、『キャプテンハーロック』とかですね、『宇宙戦艦ヤマト』とかですね、『銀河鉄道999』というのは大ファンでですね、松本零士にこそ、国民栄誉賞とかね、文化勲章をやらないかんのやないかとこう、思ってるんですけども。あの『宇宙戦艦ヤマト』のね、この主人公も、また『キャプテンハーロック』もね、男らしく死ぬ価値がある死に場所を求めて宇宙に旅立ったとこう、いわれてるんですよね。おめおめと、殺されるのを待っていない。本当に死にがいのある死に方がしたい。そこにこの人間としてのですね、生き方の大きさがこう、生まれてくるわけですね。いわゆる犬死にといってですね、価値のない生き方をしたんでは、生きてきた甲斐がないと。死ぬ瞬間が最もこの素晴らしい生き方といえるようなですね、そういう生き方がしたいという、そういうこの思いで、愛する地球を守るために宇宙に旅立つみたいなね、そういうことをして、死に場所を求めていったわけですけど、とにかくそういう生き方にね、人間の大きさというのがこう、生まれてくるわけですね。**

**時間によって殺されるんじゃなくて、時間をも支配する。時間を超越する。それがこの死の文化といわれておってですね、自然に死ぬという、自然死というものを死の覚悟性にもたらせて、ちょっと強い、難しい言い方になるんですけどですね、その死というものを自覚的に死ぬという、死を覚悟性にもたらすというね、そういうふうな、この言い方がされる。それが死の文化。その時間を超えて、殺されない、殺されない者となるということがね、不老不死という、この中国で昔からいわれておる、この不老不死とはなんなのか。それは、殺されない者となるということの意味なんですね。不老不死というのは、老いないとかね、それからその死なないっちゅうことじゃなくって、老いぼれてしまってですね、そして、時間によって殺されるという、そういう状態を待ってるというふうな、そういうこの惨めな人間の生き方じゃなくってですね、この老いぼれないためには、死に得るものを持って、命を燃え尽かせて生きるということは老いないことなんだ。だから、死に得るものを持ったとき、人間は不老という、老いないというね、そういうこの生き方が。例え、肉体は老いても、意識、魂は老いないというね。そういう生き方ができるのが不老の精神であります。不死というのは、殺されない者となるという意味なんですね。殺されない者となるためには、自分自ら死ねるというものを持たなければならない。これが死の文化なんですね。そして、その死に得るものを持ったとき、人間は命を完全燃焼させて、そして、死ぬ価値のある生き方ができるという、そういう生き方になってくる。そこにこの不老不死の人生というのが、こう始まるわけですね。**

**このためにだったら、俺は死ねる。そう思えるようなですね、人間に出会うこと。また、このためにだったら、俺は死ねると思えるような仕事に出合うこと。そこに人間における最高の人生があるというふうにね、言えるわけであります。それがこの死への自覚というものが成長することによって、死を文化たらしめるというね、そういうこの人間らしい生き方、また人間らしい死に方というものの姿です。死んでもいいと思えるもののない人間と、このためにだったら、俺は死ねるぞというものを持った人間とは、全然、人間の大きさが違うし、生き方の大きさが違います。この死を文化たらしめたね、この日本の武士道のですね、この素晴らしさというのは、これはもう世界に類例を見ない文化ですね。切腹というような、こういう文化を持ってる民族はいないんですからね。みんな殺されると思ったらね、国家の首長、国家の長たる者は亡命してしまってね、殺されないように逃げるんですよね。だから、日本の天皇は、切腹という文化を持った、その国民の長たる者だからね、絶対逃げなかった。自分の命はどうなってもいい。国民だけは助けてくれといってね、天皇は自分の命をマッカーサーに差し出して、そしてその国民を守ろうとした。その美学にマッカーサーは感動して、そして、天皇も許し、また日本の国をもですね、独立国としてですね、存在させることを認めるようなね、そういうこの配慮を成したわけですよ。もし、あれができなかったら、日本はひょっとしたら、ロシアとアメリカに分断されて、統治されてですよ、現在の朝鮮半島と同じような状況に陥ってしまってたかもしれない。だけど、天皇陛下のあの一言でですね、自分はどうなってもいいと。国民だけは救ってもらいたいというね、あの一言で、マッカーサーは感動して、こんなことを言う人間、おったのかと思ってね、ほとんどの国家の指導者はですね、戦争に負けたら、自分の命だけはなんとか救ってもらいたいって、亡命先をですね、探してもらってですよ、亡命してしまって、国民を苦境に陥れたまま、自分は逃げてしまうというのが普通の国家の指導者の一般的な姿ですよ。それをしなかった。これはやっぱり、この死に場所を心得たね、死を文化として持った、そういうこの伝統ある民族の誇りですね、これは。**

**だから、天皇は敗戦というね、そういう責任を負いながらもですね、終戦後、全国を行脚してね、ひょっとしたら、戦争では、天皇陛下のためにみんな国民が死んで、天皇陛下のために自分の子どもも戦争に行って殺されたんだからって、ひょっとしたら、天皇陛下は国民のテロによって殺されてしまうかもしらんというね、そういう状況があったのにね、天皇は何一つ、自分を守るものを持たないでね、車で全国を行脚して、そして、国民と握手しながらですね、一種、戦争責任を果たすために、国民への詫びとね、そして、感謝の行脚を続けて、国民との接触をずっと保ち続けるというような、そういう行動をなさったんですね。あれもやっぱり、普通の国家の首長はできないような、そういうことで、例え国民によって殺されてしまっても、それは当然だというね、そういう責任感が、やっぱり天皇にはあったんですね。だから、ほとんど護衛らしい護衛もなしにですね、天皇は国民の中に入られて、ずっとこう、謝罪と感謝の行脚をね、ずっと続けられておった。そういうこの天皇陛下の潔さにね、日本人も感動して、天皇が来られれば、みんなもう理屈抜きに旗を振ってね、ようこそ、いらっしゃいましたといって、天皇陛下の顔を見たいと思って、皆こう詰めかけるみたいな、そういう親密な関係性を持った、そういう民族なんですよね。**

**いわゆる死の文化というのは、いかに大きさのあるね、人間の生き方というものをつくるかということをまざまざと、昭和天皇は国民の前に見せられた。なんかこう、お姿を見ると、弱々しい感じに見えますけどね、だけど、その心の中には、死を覚悟したね、人間の強さというのがあったんですね。いつ殺されても構わないと。もう自分はマッカーサーに一旦、もう死んでもいいと言った人間なんだからね、例え、その国民に殺されようとも満足だというね、そういうこの、罪の意識を背負った責任感はね、あってですね、死を恐れずに、国民の前に身をさらしたというね、そういうことであります。とにかくこの死の文化というのは、人間の大きさを示す非常に大事な原理であります。死んでもいいと思えるものを持って生きるところにですね、最高の生き方がある。それはまた大きな人間の姿なんだと。実際問題、革命の闘士というような方々はですね、皆そういう、このためにだったら、たとえその行動のさなかに身を、命を落とすことがあってもですね、悔いはないという、それほどの大きな目的のためにですね、死をいとわないで行動した。それが、革命の闘士というふうな、そういう人たちの人間の大きさというのがですね、自分のためだけじゃない。国民のために、みんなのために闘うというね、そういう大きさが、その死というものを文化にしたところから出てくるわけですね。**

**その意味で、この人間の大きさというものをつくっていこうと思ったならばですね、俺はいったいなんのためなら死ねるだろうか。死んでもいいと思えるものがいったいあるのかということをね、自分に問うていってですよ、できることならば、このためにだったら俺は死んでもいい。このために生きて、このために死ねたら本望だ。そういう仕事をですね、ぜひ持ってもらいたいと。だけど、どんな仕事でもですね、その仕事の持ってる価値を本当に自分が理解したならばね、価値のない仕事はないですからね。どんな仕事でも、最終的には死んでもいいと思えるほどの素晴らしさというものをみんなが持ってるんですよね。ただ、その仕事の持ってる醍醐味、その仕事の持ってる本当の価値、値打ちというものに目覚めなければね、なかなか死んでもいいという心情は出てきませんけども。そこまで仕事というものの価値を自分が、知ろうとする努力をすればね、必ずどんな仕事にも人間としてそのために命を捨ててもいいと思えるぐらいの価値は出てきます。また、仕事にそういうものが見いだせなくってもね、この人のためなら、俺はどうなってもいい。この人のためだったら、自分は死ねるというね、そういう人物に出会うっちゅうことも、また人生の喜びですね。**

**本当は会社というものはですね、原理から言うならば、社員の方々は社長の夢を共有すると。社長の夢に自分も生きるというのがね、その企業とか、会社というものの、本当のあり方なんですよね。社長さんというのは、その会社を興した人ですから、必ずなんらかの意味で、その企業、仕事、業を起こしたときの夢がある。その夢を共有して、そして、その夢を実現するために共に働くのが社員だというね、そういうこの関係性が、企業という精神にはあるわけであります。社長の夢を共有して、人生を共にする。それがこの家庭生活よりも、職場での時間のほうが長いというね、この人間の人生の生き方における一つの考え方なんですね。その意味では、社員は社長に惚れんといかんと。それほどの素晴らしさを社長の中に発見して、この人のためだったらという、そういうふうなですね、この意識になれれば素晴らしい。また、社長さんは、そういうふうに社員から思ってもらえるような自分に成長することを、心掛けなければならない。そういう関係性に社長さんと社員の方々の関係性はあるわけですね。最も素晴らしい企業は、社長が、社長の夢を共有する社員がいるという組織ですよ。それが一番最高の組織だ。社長の夢に俺も準じようというね。その夢を実現するためなら、俺は命もいらんというふうなね、そういう社員がおったら素晴らしい組織ですよ、それは。**

**そういうこの死というものを文化たらしめることによって出てくる人間の大きさと、もう１つは、この生誕への意味ですね。その自分がこの世に誕生したという、この過去のですね、事実にどういうこの思い、あるいは、意味をですね、自分が感じるかということもですね、これ、重要な人生の課題であります。また、人間の大きさをつくっていくためには、なんで自分はこの世に生まれてきたんだ。自分がこの世に生まれてくる理由、生まれてきた理由、意味はいったいどこにあるのかということをですね、知ることも、これは非常に大事な、やっぱり人間の、大きさを持って生きるためのですね、大事な原理であります。人間が生まれてくるのはですね、これ、なんのためかといったら、人間が生まれてくるのは、みんな新しい時代をつくるためなんですね。それぞれ自分が今、やっておるその仕事において、新しい時代をつくる。建築会社であったならば、この建築というこの仕事の歴史をつくる。それがその仕事に携わっておる方々のですね、この生まれてきた理由、使命というふうに言うことができるわけです。使命というのは、命を使うと書くわけですけども、この使命というのは、命の使いどころというものをですね、この自分が決めたとき、使命感を持って生きるというふうに言うことができる。だから、この使命というのは、この死に得るものとの出合いという、先ほどの未来との関係性でですね、この死に得るものを持ったとき、最高の人生だというのとつながってくるわけですよね。生まれてきたということは、いったいなんなのか。それは、なんのためにこの命を使って生きていったらよいのかという使命感を、何に自分が設定するか、どういうものに使命感を持って生きるかということに、なってくるわけですね。**

**とにかく人間が生まれてきたのはですね、新しい時代をつくるためだ。歴史をつくるためだ。だから、人間はみんな、俺はいったい何をしてですね、何をして歴史をつくろうか。この命をいったいなんのために使おうかというね、そういうこの思いを持って、この人生を生き始めなければならないと。この命をなんのために使うか。この命をなんのために使うかっちゅうことが使命ですからね。みんな歴史をつくるために生まれてきたんだと。歴史をつくるっちゅうことは、新しい時代をつくることになる。生まれてきたからには、何かしら、過去にはなかった、何かしら新しいことをして、死んでいきたいというね、そういう思いが命には本来、宿っておるわけですよ。そのためにわれわれは、この天分というね、天から与えられた、俺にしかできんという、そういう能力を先天的に与えられて生まれてきてる。それが顔が違うっちゅうことだと。顔のかたちを決定するのは遺伝子である。遺伝子とは潜在能力だ。顔が違うっちゅうことは、潜在能力が違うんだ。持って生まれてきた潜在能力に必ずこの俺にしかできん、俺が世界一になることができるという能力が秘められておるんだ。それをこの自分が出したならばですね、必ず歴史をつくる、現実を動かす、新しい時代をつくるという仕事ができることになってくるんだ。そのことを自分が意識して、そういう生き方ができるようにですね、この努力するということがですね、またこれ、自分自身の生き方をですね、時代というものが持っておる、その大きさにね、この拡大していくということで、大きな生き方ができるわけですよね。時代を一歩前に進める。新しい時代をつくるために生きる。これは非常に大きな生き方ですよ。ただ、自分のために生きるというんじゃない。その新しい時代をつくる。それは時代を進歩させることだ。全人類を幸せにすることだ。そのために自分は生まれてきたんだ。そういうふうなね、思いで生きることができます。**

**建築というのは、人間にこの一生の内の最大の喜びを与える仕事なんですよね。だいたい新しい家を建てるっちゅうことはね、一生に一回しかない大きな喜びなんですよ。そのことに関わられるということは、ものすごいこれは人類の幸せに関わる、素晴らしい仕事なんですよね。その人の命に喜びを与える。その人の人生に幸せを与える。その家族の幸せを願う。そういうふうなですね、仕事が建築というこの仕事であります。しかも、建築というものは空間芸術なんですね。空間を仕切って、空間にその意味と価値と彩りを与えていく。その空間というものをどういうふうにですね、提供してあげるか。その空間というものをその家族に合うように、どういうふうにこの構成するかですね、そういうこの家族の幸せに貢献するようなね、そういうこの価値を持っております。住む家によって人間の性格も決まる。住む家によってその人間の能力も決まってくるというふうにね、いわれるぐらい、環境というものは、ものすごく大きな影響を人間に与えます。そういうこの人間に大きく支配する環境というものをつくる仕事が、建築業なんですよね。**

**この使命はものすごく、やっぱり、命との関係性において大きな価値を持っております。そういうこの建築の仕事においてですね、歴史をつくる。より大きな幸せをですね、この人々に与えることができ得るのは建築。より大きな夢をその家族に与えてあげることができるのが建築。いったいどういう建築か、どういうかたちか、どういう色か、どういうこの家の中の構造か、それを追求していく。またそのために、その家族と、その家の幸せを願ってですね、その仕事をする。ものすごいこれは価値のあるですね、社会的使命を持った仕事であると思います。とにかく、われわれでも家を建てるっちゅうことは、一生にいっぺんしかないんですよね。自分の家を建てられずに死んでしまう人もおるんですからね。家を建てるっちゅうことは、ものすごく大きなやっぱり、その人生の喜びです。それを変な建築を建ててね、不幸を味わわせてはならない。最高の喜びを建築を通して味わってもらおう。そういう気持ちがですね、建てる側にはなければなりません。また、それだけの価値のある仕事です、これは。環境こそ、人間を大きく支配し、幸不幸を決定する、そういう重要な要因ですからね。そういう責任感、あるいは使命感というのを持ってですね、ぜひ仕事をしてもらいたいと思います。とにかくこの誕生の意味、人間が生まれてくるのは、新しい時代をつくるためだと。より素晴らしい、より幸せな時代をつくるためだ。それを建築を通してどう実現していくか。ぜひ、そんなこともね、考えてみてもらいたいと。そういうことを考えてる人と、そういうことを考えてない人とは、全然、人間の大きさが違う。価値が違ってくる。**

**とにかくそういう意味でですね、この人格の大きさというものをつくるためには、実践的原理というものと精神的原理があってですね、実践的原理としては、とにかくは、この自分と異なるものを持ってる人間から何かを学ぶという、この愛がね、その人間の大きさをつくっていく基本原理だ。愛は人間関係の結び付きですからね。だから、その愛の力が成長していけば、人間は大きくなります。憎しみは人間をちっちゃくしますよ。だけど、その対立とはなんなのかという、この対立に対する解釈を通して、自分が大きな人間に成長していくということを志してもらいたいし、また、今日の話を通してですね、その人格の大きさをつくっていく、人間の大きさをつくっていく精神的原理というものをね、意識しながら仕事をし、生活をしてもらいたいと。今日が最後ですので、ぜひそのことを、皆さん方はよくわかってもらってですね、素晴らしい、幸福な、生きがいのある人生というのを皆さん、みんな、歩んでもらいたい。それがこういう話をさせていただく、私の願いであります。どうもありがとうございました。**

**司会：ありがとうございました。**

**社長：最後ちょっと、私自身も、耳の痛い話もね、いろいろありましたが、僕の場合はですね、叱ってもらえるほどね、うれしいんですね、ええ。だから、みんなも叱ってもらうとうれしいんじゃないかと思うんだけども、あんまり一般の人は叱られるとうれしくないみたいね。僕の場合、厳しくしてもらえばしてもらうほど、なんかうれしいというか、ちょっとサド的な傾向があるのかな。でも、過去に付いてる先生でも、やっぱり相当厳しい先生たちばかりだからね、特にちょっと前もニューヨーク、行ってましたが、オオタケ先生、もうぼろかすですよ。「先生、また怒るんでしょう。」「いや、僕は怒らないよ。ばかにするだけだなんてね。」もう徹底的ですよ。それがなんかね、気持ちいいんですよね。向こうにある、その気持ちというのが、こうわかるというかね。**

**さて、今日はちょっとしゃべらせてもらおうと思ってるんですが、先生のお話をね、聞いてると、なんていうのかな、一部、初めて聞いたお話もあってね、先生のなんていうか、真骨頂というかね、大変失礼な言い方をすればね、やっぱり天才ここにありというとこだね。でも、皆さんにはわからないと思う。先生のその思想のその大きさだとかね、それとレベルはわからないですよ。先生、ね、どっちかというと、にこにこ、にこにこ、して見えるでしょう、ね。ちょっとぼおっとしたところもあるでしょう、ね。低姿勢でしょう、ね。偉そうな顔をしないでしょう、ね。べつにベンツ乗ってね、おつきの方が10人付いてくるわけじゃないのよね。組織の長でもないですよ、ね。ほんで、先生、これちょっと安いですよって言ったんですけどね。１回、こう社長さんたちが集まって、３万８千円、全５講のね、コースでね、15万と、安いですよ、これ、半値ですねって言ったら、僕はお金のことは言わないからって言ってね、こう経営合理化協会にね、こう安く使われてるという意味じゃないですよ、ね。こういう値段設定されちゃって、その代わり、先生としては、人数たくさん集まればね、たくさん聞いてもらえるからなんてね、またそのまた上をいってるんだけども、これ、合理化協会、もうかってるな。いや、100人ぐらい集まってみえるみたいですね。**

**先生、社長さんばっかりがね。時流創造の経営、この命なんのために使うか、成功への階段を上る、愛の実力、本物の人間の条件なんていうのがね。不屈の事業観とか、たくましい精神力とかね。こういうのをやっぱり、悩んだ社長さん方がね、全国から集まって、先生のお話を聞きに来るわけですよ、ね。こういった先生であるということね。経営合理化協会は日本の一番大きな組織ですよ。その中で認め、ちょっとした30分ぐらいしゃべらせてもらうだけで、日本に対するデビューですからね。デビュー。講師、しゃべる先生方はいっぱいいるよね、日本人ね。その中のまず登竜門ですからね。そこでこういうシリーズものを持つということは、もう日本一ですよ。もうこれ以上ないんだから、ね。そういった意味では、先生のお話というのは、それぐらいの当然、レベルのお話でね。僕はもっとそれ以上だと思ってますが。**

**それと、今日はちょっとしゃべらせてもらいますから、５分ぐらい。すみません。僕はね、皆さんを使ってるという気は、もうまったくないんでね、その辺が問題なんだよね。社長さんだったらね、組織の長ならね、もうちょっとね、こう酸いも甘いも、裏も表も考えてね、よいしょしたりね、あいつ、うまいこと使ったろうとかね、多少、思ってればいいんだけど、僕は皆さんを使ってる気は全然ありません。全然ないね。皆さんを使ってる気はまったくない。僕から給料を払ってるなんて、もうこれっぽっちも思ったことないですよ。こいつ、使えんやつやなと思ったことはあるけどね。そういうのはないんですよ。どう思ってるかっちゅうと、できたら同志というかね、同じ志、同志であればいいなと思うわけでね、ね。だから、その辺がちょっと組織を、もう引っ張っていくリーダーとしてはね、やっぱり半人前というかね、うん、やっぱり、もうちょっと裏と表があったほうがいいんじゃないかと思うんだよね。それは、僕の、これがまた、能力でもあるし、規模だから、できる限りはね、努力しますが、皆さんを使ってる気はまったくないのでね、同志だと思ってるから。去年入った１年生でも、１年生はちょっと１年ぐらいそっとしとくけどね。半年ぐらいだけどさ。それから、ビシバシといきますからね、ね。ほんで、３年ぐらいは、もうしばきまくりますからね。一人前にしなきゃ、申し訳ないと思ってるからね、こっちは。**

**特に女の子なんかでも、結婚もあったりね、ね。45歳になって、スーパーさんでレジを打っとったらあかんでと。もう今のうちしかないでと、勉強するのはというような気持ちでやってるだけで、辞めていく人に対してもなんとも思わないしね、入ってくる人は、それでありがたいしね。でも、原則あんまり使ってるという気はないんだよね。その辺がね、もうちょっと社長、しっかりしてくださいよと言われるところがありますが、どちらかというと、僕はまだまだ正義の人だからね、ね。先生の言われる清濁併せ呑むまでいってない、全然いってない。僕はもう正義、正義の人だからね。何が正しいか、何が間違ってるかで突っ込んでいくからね。その辺がちょっとね、今後、一番反省の余地でね、皆さんからもね、そういった目でも見られてるしね、反省して、反省するだけじゃ駄目だから、実行をね、少しでもしなきゃ駄目だと思うわけね。**

**ただし、１つだけ弁解を言うと、僕は真剣にやってるんですよ。真剣にやってる。１軒の家を建ててくれる人、１つのマンションを建ててくれる人、僕は徹底的に真剣なんだよ。そこでドジするやつは許せない。なぜならば、お客さまが非常に悲しい思いをされるし、いいものができないし、ね。プロじゃないでしょうと。顔を洗って出直してこいってなもんでね、一生に一回、家を建てる。もうそれこそ、一生に一回、マンションを建てる。下手すりゃ、それで家、傾くんだからね。それをね、設計の、すみません、先生、設計のばかとね、営業のばかとね、工事のばかとね、もうそれらがね、お客さんね、必死こいてるのに、ぐっちゃぐちゃにしてくれるわけだ。もう僕はもうそれは許せないんだよね。でも、その場は怒るけど、べつに憎んでるわけじゃないんだ。それは、長くいる人はちょっとわかるけどね、ね。だから、一応、真剣にはやってますので、そういった点を理解して、皆さんはもっともっと真剣にね、お客さまの、ものを、家をつくるためにね、新鮮な仕事で一番大切な仕事ですからね、ね、頑張りたいと。先生もそれを証明してくれましたからね。それを考えてもらいたいというのが２点目。今日はしゃべりますよ。**

**３点目、うちの創業記念日は４月28日。なぜこれを決めたかは、皆さんにお話してありますが、サンフランシスコ講和条約がね、戦後結ばれて、先生のあの天皇陛下の話にいくんだけどね、だから、45年が終戦、1945年が終戦ですから、1951年にサンフランシスコ講和条約が調印されて、９月の６日に調印されて、執行されたのが翌年、1952年、昭和27年の４月28日。これが日本の独立記念日ですよ。独立記念日。それまでは、外交、大使館、全部ないんだからね、ね。全部、占領軍、進駐軍のもとにあったわけです。だから、４月28日は、日本の独立記念日なんですよ。征服されてたんだからね。でも、誰も祝う人がいないから、うちの創業記念日、忘れちゃったから、だいたいそのころだなと思ってね、当社の創業記念日にしたわけです。それは、先人の苦労、やっぱり日本という国があって、日本国民がいて、学校へ行けて、こうやって仕事ができるわけで、これね、アラブならまだいいけどもね、パレスチナとかね、もうどうする？　もうバングラデシュとかさ、こんなことやってられないよ。ということは、国というのがどんだけ大切か。大切なものは、自然に上から下りてきたもんじゃないんでね、それは先人の苦労があったと思うんだよね、ね。**

**それをやっぱり、歴史というのをね、わざわざ東京まで行ってね、ワタナベショウイチ先生に教えていただいててね、ワタナベ先生はもう現実に昭和天皇、ね、が、地方を回られたときにね、もうすぐ手で触れるところまで走って付いていったと。ということは、おつきが一人もいないんだって。車なんで、車に乗ってる運転手がいるんですね。ほいで、２人で皇后陛下と回られたんですか。それでも、誰もガードマン、いないんだから。あんなもん、石ぶつけて殺そうと思ったら、いつでも殺せるよ。というような状況を田舎で体験されて、今のマッカーサーのお話も含めてね、マッカーサーは、最終的に、ちょうど７～８年後ですか。日本は仕方なしに、あの戦争に突入せざるを得なかったと。日本は正しかったと言ってくれてますしね。戦争裁判、要するに、もう、東京裁判というのは、非常に今で言う国際法上は無効であったとかね、言われます。特に乃木大将あたりはね、なんていうのかな、前回ここでも講演された本山先生のお母さんのね、に、いろんなご相談をされてた方でね、非常にこう先人のご苦労がたくさんあったわけだよね。だから、今こうやって仕事ができるということね。**

**もう２つだけですよ。もう２つも言っちゃうけどね。先生の今日の話は、突拍子もないと思ったら大間違いですよ、ね。そのアフリカの大地溝帯から始まって、メソポタミア。メソポタミアで3,000年前だからね、ね。それで、ローマで、紀元前260年前だ、ね。今、2000年だからね、ね。僕たちはもう、それ全部、僕は、それは全部、教えてもらってるから、最終、中国いって、インドいく。それは何千年先か、一万何千年先かわかんないけどね。金星人の生活をちょっと皆さんに教えておきます。あんまり変なことを言ったらいけない。金星人にセックスがあるかっていう問題なんだよね。セックスはないです、ね。そのころになるとね、もう男女の区別がつかなくなってます、ね。それでセックスはしません。それでもって、子どもは生まれます。それでもって、生まれた子どもは、みんなで育てるわけだ、ね。そういう世界というのがね、すでにもう別の惑星ではあるし、地球は、13歳、12歳といわれるのは当然ですね。そこまでいくべき星なんですよね。今はまだそのレベルですよ、ね。だから、先生の言われた、その歴史観的なもの、僕はあれは、初めて先生からの口からはね、勉強不足ですから、初めて聞いたように思いますが、やっぱり、すみません、先生、余計なことを言って。言葉を選ば、ああ、言ってしまおうか。あれぐらいの歴史観は持たないと、こんなお話はできないですよと、僕は思うんだよな。それは、僕は本山先生から教えてもらってるから、ね。地球がどうなるとかね。**

**最後の話ですよ、ね。僕がなんだかんだ、けんかに強いのはなんだと思う？　僕はけんか、負けないよね。けんかに、一言で言えば、平たく言えば、けんかに強いです、僕は。絶対負けない。みんなも守るし、お客さんも守ります。僕が守ったお客さんで、守り切れなかったお客さんは一人もいないよ、過去。だから、全部のお客さんと付き合ってるじゃん、ね。2,300世帯かなんか知らないけどさ。あと社員、ね、社員は完全に守ってますよ。守ってくれという限りは。うちの社員である限りは、ね。僕はなんでもしますよ。僕は絶対負けない、うん。なぜかというと、唯一、僕の、僕が思うのは、これまたちょっとおこがましい言い方だけど、まあね、お互いの理解だから言うんだけども、17歳でなぜ人間は生きてるのかという問題にぶち当たっちゃったんだよね。もう10年間、非常にもう、もう苦しい、苦しかったですよ。父親を亡くして、それで、27歳ぐらいで、これは喜びですがね、その真実をつかんだわけだ、僕はね。これは強いですよ。絶対強い、うん。そういった意味でね、こう人間はなぜ生まれてくるのか。それで、どこから来て、どこへ行くのか。死ぬ前の話と、死んでからの話だけどね。先生のその科学というかね、社会科学だけども、哲学とか、現代のそれとは違う領域の話だけどもね。これは僕にとってのもう、唯一の武器ですよ、武器。だから、僕は絶対、けんかには負けない。根っこを知ってるから。自分が10年間、求めたものが得られたということと、根っこを知ってるから、僕は負けない。仕事でも負けない、ね。**

**それは、現実の問題と、どれだけこう、なんていうの、つながってるかはちょっと別にして、皆さんも、先生の話を理解して、なるだけ深いところでつかんで、ね、金もうけしようが、お金持ちだろうが、貧乏人だろうが、病気だろうが、病気じゃなかろうが、そんなことはどうでもいいことです。死んだら終わりや。すぐ死ぬんだから、みんな、ね。だから、なるだけ遠くの過去からね、未来を見つめるということと、やっぱりこの地球から宇宙を見つめるということと、ね、何が大切かをつかんだ者が強いということですよ。ここはあんまり関係ないよ。あんまり賢い人はいないけど、どっちにしても。ここはあんまり関係ないよ、ね。こういういろいろ天才はいるからね。先生も、天才だけどね。天才はいるけど、僕たちは天才じゃないからね、ね。だから、仕事を通じて自分を生かしていく、ね。その仕事として、家をつくったり、マンション、これはもう住宅だけどね。住宅をつくる仕事というのは、的確だよね。それで、もし、みんなは嫌々やってるわけじゃないんだから、やりたくてやってるはずだから、同志であるからね、ね。そういった意味同志でなきゃ出てもらったらいいし、同じ同志でも、この住宅のつくり方、私はまた高級住宅やりたいと。坪100万がいいわという人は、また別の家があるからね、そこへ行ってもらえばいいんだけども、会社にいる限りはね、面倒見ます、ね。僕も、面倒見られますけどね。**

**そういった意味で、今日はもう先生のね、あの、非常になんていうかな、真骨頂というかね、先生なんか、ふわっとしたね、温和なお顔はして見えるけどもね、厳しいところでね、やっぱりつかんでみえるというかね。本山先生なんて怖いですよ。１人や２人、人間が死んだって聞いたって、ほったらかしですよ。何千万、何万人が死んだって、彼は冷たいですよ。なぜならば、またその人たちがどうなるか知ってるからね。彼の、例えば使命は、ね、この１人や２人の命を救うのが使命じゃないからね、ね。だからそういった意味では、非常に冷たい人ですよ。思風先生も、そういった意味ではね、見通してみえるから、いろんな意味で、冷たいとは言いませんがね、非常に冷静といいますかね、全体的に大きく見て、今を捉えてみえると思うわけですね。**

**だから、私の一部、その考え方とか、体験も通じてね、先生の話を少しでも理解してね、間違ってるという人は、間違ってるでいいんですよ、ね。でも、それならそれで、その根拠を持ってくれと、ね。宗教なら信じるか信じないかでいいでしょう。今の宗教ならだよ。信じるか信じないでいいよ。信じない人は信じないんだよ。先生にはあかんよ。その根拠がいるよ。論争してもらわなあかんでね、ね。そのためには、頭もいるし、勉強もしなきゃ駄目で、先生はその論争を挑んでみえるわけだから、違うと思うやつは言えばいい。違うと思うやつは言えばいい、ね。それがまた能力を高めることになるからね。これは宗教の話じゃないからね、ね。でも、なんていうのかな、そのころには、世界宗教ができてますよ。科学と宗教の統一がされてます。その元になる研究を、先生も哲学的にはまったくそうですが、生理学的、または宗教と科学の統一というのを本山先生も一生懸命やってみえるわけだ。日本とアメリカとかね、行き来しながらね。**

**それに私たちの稼いだお金は、はっきり言えば、月40万ずついってます。事件の前はもっといってました。だから、合計すると数千万円いってるよね。それは、私のお金じゃないからね。みんなのお金を遣ってるわけだから、なんていうの、もし、うちがね、もっと売上がよくて、利益が出てね、あるいは、日本の税制に関係なく、私はなんでも寄付行為をしていきますよ、ね。100万円出せば、バングラデシュに病院が１個できるからね、ね。月500万も掛ければ、フィリピンに学校が１個できるからね、ね。そういった意味で、もしね、いろんな希望というかね、あれば、また見に行けばいいし、そういった活動もできるわけだね。そのためには、やっぱり、多少ね、数字にも挑戦しなきゃ駄目だということで、ちょっと言ってもいいとは思ったけども、ね、皆さんのお金が数千万いってますよ。そういった意味では、皆さんが努力することがね、そういう地球の平和を守るために生かされてるわけだから、ね。いいんじゃないかいということです。ちょっと自分自身の反省も踏まえてね、皆さんにも、なんちゅうの、考え方を持ってもらって、僕もみんなを守る。ある程度、指導もするからね。皆さんも、社長自身もね、補完してもらいたいと。欠点は必ずあるわけだからね、ね。はい、ちょっと長くなりましたが、この際、言うたろうと思ってね、言いましたので、以上、終わります。はい、ありがとうございました。**

**司会：ありがとうございました。**